八郎
前傳 椿說弓張月 前編 卷下

913.56
Ta624t
c

鎮西八郎為朝外傳 椿說弓張月前編卷之四

東都 曲亭主人 編次

第九回

野風陣没して活路を開く
八代殿戰して飛矢に當る

一

官軍は新院をねゝめたてまつり。討もらしつる宗徒の武士を召捕べーとて。軍兵處々に部して。隈なく索まゐらせけり。當下公卿僉議ありて。爲朝倘西國へ逃くだりて。ふたゝび事を起さゞゆゝし。紀御大事と。遽に彼が妻子を生拘て進らすべきよし。遞馬以もて。菊地原田が許へ仰つかはさる。太宰府は遥かに遠ければ。洛に合戰ありし事いまだ聞ねど。忠國白縫はさらぬ。士卒みなかゝるべーとも思ひよらねば。去年より只そなたの天のみうち瞻けふや御曹司のかへりぬふ。翌や音耗のあるらんとて。まつとまつ程に。保元元年七月廿三日の夜間過るおろ。俄頃に恩刷かりければ。忠國あやゝみて。ひとり臥房を起出遠侍まで行て見る時。宗徒の家隷吉田兵衛高間四郎。連忙しく走り來り。忠國見て。あながまや。あさは何事ぞと問む。兩人答て。實やらん洛には。鳥羽法皇崩御の折ゝも。新院御謀反の聞ありて。いぬる十一日の朝まだきに合戰はゝとまで。その日の中に新院うち屈ぬひしと

国立国会図書館 25.8.10
210054

ぞ。去かるに下野守殿（義朝をいふ）は内裏へ召れ判官殿（爲義をいふ）は八郎殿（爲朝）をはじめ。六人の子息を將て院の御身方に參りねひしに軍敗れて後は父子兄弟みな四落八落におりゐひて。その生死をしらぎさるによりて菊池原田が徒勅命をきしはさみ年來の鬱懷を散さん爲只今押寄をるとて。みな騒動つかまつるにていおの事誰が聞定しとゆふにもあらねどいとおぞつかおけれぱあらせまゐらをるへといふ忠國聞て肩を擽時もあるべれに一院（鳥羽帝）崩れゐひて御歎の氣色はおく却て新院と主上の御位をあらそひゐんといふ事まことしからぎ。去かきども菊地原田が押寄をるといふは虚說にもあらト爲朝久しく洛に在して宗徒の郎等もおほくは彼地にあり今此間を窺ひ彼徒がかゝる流言して劫し直に攻落んとをるにやあらん。とく合戰の用意をせよと仰をる折しも忽地彼此に喊聲發り鬨に響て騷し吉田高間はこれを聞といへども敢聽がぎさては風聞虚からで敵も間ぢかく寄たりとおぼし。そきがし等さつ罷向て防ぎはいんに心去づかに物具めさるべしといひかけて飛がごとく退出けり當下忠國は白鎧を呼て去かくの事を告らせ鎧一縮して出ゐよかくて吉田高間の兩人は正門の望樓に登りて敵陣に對ひ一院崩御の時に當り私に干戈を動さんと欲をるは何人ぞ。その名を聞んと喚はりけり時に寄手の陣より卯花威の鎧に星白の兜を飛て佐目おる馬に乘たると裾繩目の鎧に高角打たる兜を戴て鹿毛おる馬に乘たる武者二騎箭火の光に馬伐すゝめ汝去らぎぞ洛に入は新院の御謀反發覺汝等が主君とたのみたる爲朝も院の御所にまゐりしがいぬる十一日の一戰にたつ足もおく打負て生死も去れぎなりけるぞ。かくいふは菊地原田が股肱腹心の家隷に玉名太郎宇土平三郎といふものゝ。ヨが主俄頃に宣旨を蒙り爲朝が氏族親族を生拘て進らせん爲發向せりとく弓を伏兜を脱て縛を受よとぞ回答ける高間四郎聽然とうち笑ひ九箇國を管領して武勇海内に鬼る御曹司の御館に夜討をるは死神に誘れたる山賊野伏の所爲おらんとおもひに菊地原田の歴々が勅命を棄て向ひゐるにおそ夜も深くされば待べ死物おそおけれ但雖よく釧たる征矢のみ用意いたせしに受て見ゐへといひも敢ぎよつ引摽と發つ矢玉名太郎が内兜に箙深くぐさと立しかば忽地馬より捏と落るを差詰礫詰射る程に少し射去らまされて色めく處を忠國は一社木門をさつと開せ百五十騎社兵を前後左右に從て暮地に走出たり吉田高間もこを見て望樓より走り下り。續て敵にかけ向ひ面もふらぎ挑こ戰ふ寄手は大軍おりといへども死を究たる忠國の百五十騎に切たてられ

一町あまり退くを忠國ハ遠くも追ず。ーづかゝうち入りて人馬を休るゝ身方も三十騎ハ深疲を屆二十三騎ハ討れ本り白縫ハ日來雄々しきかひありて鉾打たる鉾卷して小足具ゝ肚甲さしかため白柄の長刀をときハさみて紀平次が妻の八代以下廿餘人の女使をゝ一瘢ゝ打扮せ床几ゝ尻をかゞて在せしが父の後方ゝ居かねりて。只今の合戰ゝさとを疲勞ゐひけめ。とらハかハりて一防ぎふせぎ侍らんといふを忠國頭をうちふりて。それハ〻めハ〻洛ゝ合戰ありしといふを敵の流言おらんと思ひしゝ今その英氣甚鋭きを見れば全く偽りゝもあらざるべし縱御曹司敗北しぬゝとも智勇兼備りて萬夫不當の良將なれば討死ハしぬハ〻しかハあれど日來ハ馬前の塵を取し九箇國の大名も今日忽地讐敵とありて後詰をまたん便おけれバよしや御身等が寄手の兵を百騎二百騎擊とるとも吾ゝ于て敢益おしさしも九州ゝ名たゝる御曹司の居城を攻らるゝゝ女ばらを相語て防禦しおんどいハれんも朽をしそれハ矢種のかぎり戰ふて潔く肚かゝ切らんと思ふおれば後門へ敵の廻らざる間ゝ御身ハこゝを落て御曹司ゝ環會まおらせ。ゝが志ども傳へ合戰の容をも物かさりハへと仰をれば白縫涙さしくみて。ゝらハ女子の身ゝしあゝど父の子ゝして爲朝の妻なり今夫の生死をしらぞ父又討死しぬ

ふを外ゝ見て。いかで落ゆき侍るべき殊さら劾きより母御ゝ後れまゐらせ父の慈愛ゝ人とおれバ。させる孝行ハ竭さぞとも。せめて死出の鄕導して三途の川の筏とも埋艸ともおり侍りてん。かく思ふ身をゝりおくも落よ活よと仰をるハ味氣おき世ゝ存命て憂を見よとやおぼをらん父の仰ハそむかゞと辨おがら是のみハうけ引がたく侍るといふ恩愛の切おるハ今おの一句ゝあらハ生て勇死こゝろもよハりゆく忠國も顏うち背向死んといふハ子たるの誠助んとをるハ父の慈悲なり。そも天地ゝ孕れて。この世ゝ生を稟たるもの。子をおもひ親を慕ふハ天とぶ鳥地を走る獸も異おる事のおけれバこそ。桓山の四鳥すらなほその別離を悲こゝれ況それゝ子といふものハ只是御身おれバゝが年浪のよるをバ厭ハぞあら死風ゝも當ゞと養育成長ゝ及てハ過世ゝ緣ゝし締けん。思ひもかけぞ源家の御曹司を壻らハとして望足りぬと思ひしも成者必衰の理を脫れず。この大軍拔引受て屍を戰場ゝ曝を事これ武者の常ゝして。敢悔べき事ゝあらぞ。さるをおもひ辨ぞ父が心ゝ悖れるゝ。大おる不孝ぞかし親子ハ元是一世の緣もし養の恩をおもはバ。脫れがたき死を脫れ父が亡跡をも吊んとハせぞいと聞ゝきなしといひ懲を。法處ゝ矢叫關の齊間ぢかく聞えて高間四郎ハ鎧ゝ立矢を夥折かけ黑皮威も流るゝ鮮

血に紅成と染なさせ大床ちかく走り来て敵ハ既に二の木門まで攻入りて吾ら兵衛も撃れさむらひ死。そもがし防矢つかふまつるその間に。とく生害あれかしといひかけて。又敵軍に走むかへば。阿曽忠國莞爾としく。いざさらば最期の一戰して。こゝろよく腹かき切らん。その馬寄せよと焦燥つゝ。禄より閃と打跨手綱かい操馳出る父に續て白縅も駈向んとをる袖を引とめ。八代諫ていへりけるハ。ゑらハが夫紀平治も洛にて討死し侍りつらんと思へば。たえて存命べきあゝ祢おしといへども。おほかくて侍るおるハ。夫の忠義を思ひくみ君の先途を見とゞけまゐらをべう思へば。さえ八代が胸くるしさをもあらせぬひ。一旦大殿の御こゝろを安めて。おわ迎れがたくハその時に。ともかくもおらせぬへゝしとあば〳〵諫てとりおく馬に抱き乗せ。みづから轡づらを引向て西の門より落行けり。忠國ハ討のこされたる四五十騎の兵を從へ血戰時をうつせしが。終に寄手の軍兵を。一の木門まで追退け。その身も許多深痍を負て。舊の處へ立かへり見るに既に落たりとおぼしくて白縅えあらざれば。ふかく歎び高間四郎をちらく招ち汝とが分錯して首状敵にとらせぬ爲ハやく火を放よといひもをはらぎ上帶解て鎧脱捨。肚一文字にかき切れば高間ハ主の分錯してやがて鎧に火をかけつゝその身も煙の中に飛入り灰燼とおりて亡にけり。さる程に白縅ハ八代等廿餘人の女使孤將て西の門より走り出るに。こゝにも寄手まねりぬと見えて。闇夜に見く兜の星ゑ片々ゑる白梅頭上に開き輕盈たる黄花庭除と照らそに異おらぎ敵ハ門をひらくを見て。をハ城兵ハ落ゆくぞ。それ討留んとむらたつ折しも爲朝の畜柳たる野風と呼べる猿ハ白縅に先だちて。門より衝と走り出寄せあふ軍兵に駈ぎのひ當るをさいハひに嗤倒せば。いひがひあゑ雑兵ハ向脛を啖れ肩腰を折かし。右往左往に亂ぎ駈ぐを白縅八代等ハ太刀長刀の刀尖を揃へ。咄と嘯て走りかゝり東を打西を靡け。終に一條の血路を開らき東南を投て走りける猿ハおほ主を輙く落さんとや思ひけん。處も去らで跳めぐり〳〵矢弓をも怕れぎ。刀劒をも避ぎ騎馬武者をハ馬の双膝に齧著て反落させ歩武者をば砂を蹴かけて眼を遮りなどせし程に寄手おれに辭易して。只遠矢に射てとらんとをされば野風猛しといへども身も又鐵石ならざれば立ところの矢廿餘條に及び。大に嗜る事一聲終に立縮に死てけり。嗚呼奇なるかな。嗚呼痛しきかな猛獣にしてよく人に押に一言の恩を感じて兩頭志をおおぢくし身を喪して主の必死を救ふ事人間にもなを稀にて有がたかりし動止なり。おの戰果て後寄手の大將菊地肥後守野風が事を傳へ聞てふかく感激し。

ヨが士卒彼猥が忠心ヨ類れとて。その皮を陣太鼓ヨ張らを家の重器とあたりしヨ建武の年間寂阿武重が時ヨ至てもおわれを相傳して數度の武功を顯しけるとおん間詰休題白縫ハや、一方を切脫しが夥の女使も處々にて押隔られハ代おらでハ身ヨ從ふものもおく頃しも廿三日の陰魄も山挾ヨ昇るべかめれど天結陰翠雨蕭蕭と降出して ゆく路のいと暗ゐに武者十騎あまり蕉火をふり照しつゝ一烟走に追蒐たり白縫ハ且戰ひ且走り。又五七町落伸て見かへをバ八代ハ後れぬるとおぼして。呼べども〳〵回答もせぞこハ朽をし彼を擊せてヨれのみ活んやハとひとりおち馬の頭を引かへせば。只今城ヨ火を放しと見えて忽地西ヨ當りて火光天ヨ衝き煽々として燃揚るヨぞ白縫潸〳〵然と淚を流し已おん〳〵父ゑ討れぬひけんヨが身も死をべき時至れり愁ヨ落伸て。去バしも後れまゐらせしこそ胸くるしけれ。さらバ最期を急んとて城の火光を燭としつ。舊の路へ馳てゆくこの時八代ハ白縫を落さん爲潛ヨ引下りて。ふたゝび逐ひ來る敵を拒三騎ヨ疲屓せ二騎を切倒し首を取て立あがる折しも矢一ッ來りて八代が吭のあたりへ丁と立バこそバしもたまらぞ倒るゝを軍兵四五騎下りたちて首をとらんと競ひかる白縫ハ立かへりつゝ遥ヨ見く證をあハせ長刀を水車ヨ如くふり輪して。五騎が中ヨ蒐入り〳〵忽地切伏せ薙倒をその威勢奮然として當るべうもあらざれハ。みお仰ぎ視て舌を掉ひ是おん女丈夫と聞えたる爲朝の内室おらめ彼いかヨ勇敢とも續く郎等もあらざるヨ。只射て落せと罵りて。七八騎ヨ軍兵彼此ヨ立わかれ。木の蔭岳の上より射かくる矢ヨ馬ハ太腹を射させて屏風を倒をがどく主ももろともに撲地と顛臥を射て落しぬとよろおびて。おの〳〵弓矢を掻遣棄太刀脫かざして走り來た。吐嗟白縫擊るべく見えたる處に誰とハおらぞ道次の藪蔭より石を飛を事壓のどく先ヨをゝみし軍兵三人立地に打倒さる。これ等ハ五騎十騎の半武者なれバ。今助兵あるを見て。かおハゞとぞ思ひおん。こな四散ヨ逃奔けり白縫ハその間ヨ突たる諸膝を踏おほし逃るを逐んとすゝむと。こや喃々と呼びかけて。裳笠被たる大男藪蔭より走り出被たる笠を脫捨つゝ。ちかく來るを見るヨ是八町礫紀平治おり白縫はおハ思ひかおぞとばかりヨ落る涙をかき拭ひ。いかヨや紀平治ヨが夫ヨハ恙おく在ままをか館をバ菊地原田ヨ攻らまて高間吉田等ハさらおり。ヨが父も討死しぬひぬとおがうへハ後ヨこそいため。いともこゝろもとなゐ。ハ御曹司の御事ゑと仰をれバ紀平治おとりちゝくつい居て御おころ易く思しぬへ。いぬる十一日の軍利をうして身方の軍兵大半討死をといへども御

210054

曹司は薄疵も負ねゞ近江のかたへ落ゆふとき白河の山中ゟ如此〳〵の仰を蒙り己
と を得ぜ其處ゟて別れまゐらせ夜を日ゟ嗣て走下りしが今宵城のかたゟ當りて遥ゟ
火光の發るゟ驚かれおほ逸はやく走来る折もおそあれ夫人には夥の敵ゟ逐留られ既
ゟ危く見えゐへゞ石を飛して仇を退け恙おき尊顔を拜まる事是ゟが身の僥倖おりと
一五一十を述了ゞ白縫は爲朝の輙く寡伸ゐひしと聞て少し安堵うれしきかお御曹司
ゟはおほこの世ゟ在しける活るかひあるゟが身より健氣おるは野風こいと惜きは八
代がおとおりとてこの事彼事を語り出浸ゟ落涙おりしかゞ紀平治も瞼を去はたゝき
山雄といひ野風といひ主ゟかはりて死をる事過世いかおる契かありけんこれを思へ
ゞ去年の夏わが君上洛しゐゟ時野風が拒まゐらせしもかゝるべしとの前象こそれゟ
引かは紀平治は今宵の合戦ゟさへ後れたれゞ只面おくも思ひしゟ八代が敵を拄て潔
く討死せしのみ少しは心やりこかしといひつゝ敵の捨こりける松明の燒さしを拾ひ
とりてふり照らし妻の死骸を引起せゞ吭より項まで鏡中過て射徹され血ゟ塗れつゝ
手ゟもてる大刀の刃はこゝお斷れて鋸ゟ異おらねゞさこそ手いこく戦ひつらめとおも
へゞ見れば白縫も共ゟ歎きの數そひぬ。のくて紀治平は松の枯枝を伐おとし死骸の上

ゟ積かけて薪火をさしはけつゝ南無と念ぜる聲とともゟ忽地發と燃うつる烟とおり
てたちのおれゞ再び敵ゟ逐来ぬ間こゝ誘ゐへといそがし立主從浦曲を投て走りけるゟ。
東雲ちかくおりゆくお袖敵ゟ押隔られたる女使ども此首彼首より參りあへり有所ゞ
いよ〳〵怪しめらはべしとてみなつぼ折姿ゟかい繼ひ笠ゟかく打戴てゆくべき路も
おらぬ火の筑紫を其日船出して四國のかたへ贈せける。

第十回

爲朝單騎江州ゟ走る
藤市馬を認て北濱ゟ到る

有左程ゟ爲朝は白川の山中ゟて紀平治を筑紫へかへし。よるべおき身もさしてゆく繁
ぬ船のさゞ波や滋賀の都伝後方ゟ一つ湖水を北へ落ゐふ頃しも七月十一日の事おれ
ゞ盡は暑ゟ堪かねしも夕こえ来れゞ鶏鳴こ真野の入江もうち過て尾花浪よる秋風ゟ。
衣吹せてゆく〳〵も中濱のゟたりやゝ越て北濱のおなたまで来ゐふとき夜はやゆ
たく深ゟけり。とても借べき宿もあらぬゟ樹の下岩の挾間おりとも霎時憩はやとおも
しけるゟ路の傍ゟふりたる神社のありしかゞ。やがて馬より下りて社壇ゟ尻をかけ馬
ゟ對て宣ふやう。さても汝は幸おたものかお新院けふの戦ゟ勝ゐはゞ父もこれも夥の

所領を賜りて汝も又玉鞍金勒に衆花を示せべきにかく落人を乗せありきてさこそ物うく思ふらめ。今は身の暇を得させるぞ。いづ地へもとくゆきてよき主を求よと仰つゝ持たる弓をとりなをし臂のあたりを打なへば馬は忽地身ぶるひし北の濱方へ馳去ける。のくて爲朝は社内に勤居て父の行を玉同肥の事宰府に殘せし妻子の事まで。何となく思ひつゞけて。ひとり廣前に額づき。あばらく祈念をなへば簷ちかう飛ぶ螢も誰魂ならんと怪しまれ磯うち洗涙音松ふく風は敵の来れるかと耳を側だてまどろまぬ夢に夜もやゝ明ゆく頃しもあれ外面に高く鏑の音をけり怪しやこは馬のふたゝび立かへれるかとひとりおち格子を少し押ひらけて見なに年紀六十あまりの老翁牧馬伝幸て来れるおりこの老翁爲朝をはくく見て君は築紫の御曹子八郎君にはは在さぞやといふ爲朝も彼が面影は見たるやうにおぼしけれ少しも匿なはぞいはるゝどくわれは八郎爲朝おり。そも汝は何人ぞと問なふに老は地上に頭を著君はあろしめさゞるべけが。それがしは大殿爲義朝臣に馬飼に藤市といひしものこそ。あの十歳あまりむかし身の暇を賜り近江は故郷なれば比良嶽の麓なる荒川の北在家に退居し樵夫の業をおして世渡るたゞしが。今はかく老くたちてその業を勤がたさに人の射てとりし獣の

皮を買受おれを戦人に遊與して活業と致すおりあかるゝきのふの軍に新院方打まけたまひて大殿をはじめ奉り居多の郎君も往方おく落うせなひしと傳へ聞かゝる時にこそ賤しものゝ志をも見せまゐらはべけれこが里ちかくも来なへかしと思ふから通夜いも寐らをぞあくる狀待佗て起出れば。この馬こが門に走り来て頻に嘶さふらひし。おゝ落武者の放馬おらんとて。熟これを視るに驚て認得ある爲義朝臣の秘藏なへり。唐鞍を置たれむ。さてゝ御父子のうちおのゝたりへ落なひて野伏おんどの爲に討れなふかと今さらに驚をせめてその御亡骸おりとも尋索てかくもべく思ひおがら。この馬いづ地より来れるをあらぞ。あゝはれど。むかし馬飼に馴て馬のこゝろはよくあり。たり馬は来し道を忘れぬものおれば。これが歩むにまかせて索まゐらせはやと思量し。前に立てまいりしに馬はこの社頭に止りて更に動かぞ只見れは社内よりさし覗なふ君は。むかしいと効推ませしとき見奉りし。八郎君の相貌ありこゝをもてはやく御曹司おゐる事をありてはと一五一十を述しかば爲朝斜おらぞよゐこびおぼし。さは藤市とぞらんにてあり不るかあの鞍は此度合戦の料にせよとて父の賜りたりけるに不意も汝が目標とおりぬるも主従の縁にし竭さるおるべしと宣ひて爲義朝臣の往方おれざ

る事。こゝまて馬を放遣りし事どもを觀示しぬよゝ藤市ハ或ハよろおび或ハうち泣て。とかくこが家に潛せまゐらせんといふ。その志に恃らんも却て心おきに似たり。さらばし汝が家にありて竊に父の往方をも窺まゐらすべし。さるまてもこの馬の汝を導ねしこそ怪しけれ。こハ全く神明の冥助によれり。そもこの社ハ何の神を祭り奉るかと宣ひけゝ。明ゆくまゝにうち仰て見ぬへハ八幡宮の三字を寫したる額ありけり。藤氏の御神の鄕導あぬへる事疑ふべからず。おかれハ馬をハ直に進らをへう思へども。むかゝしき廟祝さへおしと見ゆる神祠に活る物を進らせんもよしなし。これをハ男山へ獻らんと宣ひしが。四五日のゝち藤市ハこの馬を牽て八幡へまゐり。鞍置たるまゝ彼神社に進らせ潛に主君の武運を祈念して。次の日荒川へかへりけるとぞ。

第十一回

楊梅瀑布に御曹司山祿を殺　石山温泉に武藤太舊主を賣

爲朝ハ藤市が誠忠を感ぜおぼし。その日誘引まて荒川に到てぬへり。此とお泊山ふところにして世を潛に究竟の地おれば。おゝまて親同肥の往方を聞定め聚會てこそぬたゝび事を謀るべけれと議したまふ。藤市ハ妻もおくて身ひとつの心やをさゝ生活の間あるをり〳〵大津坂本のあたりに出て世の風聲を聞んとしつゝも楚と聞定めぬる事おくてうち過せしに七月の下旬に及て有一日中濱へとて出けるがゆゑてより程もおく。忙しく走かへりて爲朝のあとり近うまゐり。今宵大殿の御往方を聞定めてひといひもあへぬ涙を潛然と落しけれハ爲朝うち驚て。あら心もとおぼ父にハ捕れぬひつるかと問ぬへども。あハ〳〵しが程ハ回答も得せぬ。おほあハ〳〵問れてやゝ瞼をかゝはらひ。さても人の申ゝを聞に。ゆぬる日軍敗れし時左府頼長公ハ流矢に項の骨を射させて薨ぬひ。新院ハ爲義朝臣をはゞめとして光弘季能おんど僮五七騎に供奉せられ如意山に入らせぬひ。おゝまて人々に暇をぬいり。光弘季能の三を召俱して知足院の邊おるあやしの僧房に入御ありて御髮をおろしぬひしかど。終にハ探し出されぬひて讃岐國松山へ遷されぬひぬ又爲義朝臣ハ。五人の御子達とゝもに東國へ下向あらんと議しぬよに俄頃に病着に卧してその事かおハを。今ハとて思ひたえ墨の衣に容を變て嫡男義朝が館へ赴ぬひ頼賢頼仲爲宗爲成爲仲おの五人の御子達も勢力竭て搦捕られ。みお義朝に預下しぬへり。こゝに少納言入道信西ハ爲義御父子を害せん爲清盛と示し合せ。その叔父おりける平馬助忠正。これも新院へ召れしが降人とおりて出たるを清盛うけぬりて

昔を到そのこゝろ清盛既ゴ君の爲ゴ叔父を誅せり義朝も又父を討よといゐん爲へされば義朝ゴ仰せて御父爲義法師以下五人の兄弟を誅せしめゐふゴ及て義朝ふかく推辭ゐへどもかなゐぢ痛しや大殿をもトめ奉り御兄弟みな松岡山ゴて首を到られ剩おほ幼稚在せし三人の御子をも討せゐひつ母君ハ八幡詣のかへさゴおの事を聞食て悲歎やるかたおかりけん五條桂川へ投ゐへり。といまだ語りも果ざるゴ爲朝泉のどく悲死かな父母兄弟みな黄泉の客とおりゐひぬ爲朝ひとり存命て何かいせん父の仇ハ兄義朝へ向ゴこれ二條河原の一戰ゴ。只一矢ゴ射べかりしを縱君の爲へとて兄を討んハ歟ゴひとしと思ひかへし兜ゴ星を射削りて走らせたり。もしかゝる事ありとあらば。胸さか射徹してくれんずもの。今ハいかゴ悔ともかひおし直ゴ洛ゴ潛上り義朝信西が首を探切て路碎き刃ゴ付ぬかん程切死をべしといえ死まきて物狂ハし死までに見江ゐへべ藤市ゴ前ゴ携り後方ゴたち。おは日来ゴ似げおくも見えゐふよしやその人を撃ゐふともいかべかりの孝養ゴおるべき只来くゴ跡を吊ゐハんこそえるかゴ勝ぬべけれおどさま〳〵に諫こしへらいよ〳〵ふかく潛せまおらせける爲朝つく〳〵おぼしけるハ。これ筑紫ゴありしとき既ゴ九箇國の民の心を得たりとかく宰府ゴ下りて再び九州を切從へ新院を竊出しまおらせて重祚おし奉ゴ。これ日本國の總追補使とおらばや。と謄太くも心を決し。まづ宰府の形勢を聞せゐふゴ域をべ菊地原田ゴ攻られて舅忠國も討死し白縫も燒死たりと聞えし程ゴまハ〳〵憤りゴ迫おがら人ゴして肘おく鳥ゴして翼おゐ死がどく既に左右の佐をうしおひて速ゴ事を成しがゝけれべ。心おらもも又徒ゴ日を過しゐへり。おかるゴこのお袴藤市が家へ夕ぐれ毎ゴ獸の皮をもて来て賣る。五十あまりの男ありけり。おれが来る毎ゴ爲朝の弓弦れのづから断しかべ。ふかく怪み有一日藤市ゴおかゝの物がたりして彼男ハいづ地のものぞと問ゐへべ藤市答てそれがしも楚とハおらねども北方ゐる小松山のほとりゴ住むよし彼ゴづからいへり件の男おの春のこ袴より皮をもて来て賣ゴ。いかゴして獸をべ取やらん皮ゴ鏃の疵もおし全く疵おき皮なれべその價もよ袴しけれど敵價を論ぜんともせぢ。こおたよりとらをるまゴ〳〵鈔を得てかへりひといふ爲朝聞ゐひて。されべこそ怪物おゴ彼が来る時ゴ。ゴが弓弦ゴ断るゝ事既に數回ゴ及べり。ゴが弓ハ五石ゴあまゴて弦ゑいと太やかおれべ。おのづから断んやうふしかさ彩て来さらんゴは碁目をもてこれを試ぢべしと宣へべ藤市ハ緣由を聞て不意も手骨竦然ておぼえける且していふやう。今はた思ひめや

らせべ怪しとをる事おきふしもあらぜ宣ねをる引目の事虫の蔡といふ字を書いねいらおる故やらんと問ふ爲朝答たまふやう夫引目鏑の名ある事ね鏑の四方ふ目をくりて。これを蔡の目ふ象るおゝをもて蔡目と稱せり蔡ね陰物の祖ふして月中ふ胎托もお の故ふ鬼魅ふかくこれを怕る且弓ねこれ彼月ふ擬ふ矢を刻ときね上弦ふたとへ引滿るときね望月ふ象り發刈の後を下弦ふ表を一月三十日の象ね即一弓の上ふ明ふして。表裏陰陽の徳を備又上下ふ日月の象あり天の二十八宿地の三十六禽みおその氣を籠ぜといふ事なし。又鳴弦ね弓弦を鳴らをのふまして矢を發さぜ弓ねかおらぜ白木を用ふ男子生るゝと死蔡目鳴弦の法を用てをるものね桑弧蓬矢その純陽彼取て。もて邪魅を征し志を四方ふ示をものゝ見よ〳〵翌ねかおらぜ彼が妖の程をあらねをべしと宣へべ藤市ふかく感佩し。その夕ぐれをまちふけり。かくて爲朝ね次の日蔡目法を設て彼男をまちねふふ秋の日の暮やをく遠死寺々の鐘おとづれて。日も山挾ふ向入とするお彼件の男生平のどく獸の皮二三枚を背屑ひつふ藤市が家のほとりちかく来て。既ふ門ふ入らんとしておばーうち仰ぎ呵々と冷笑て裡へね入らぜ踵を回して舊の路へ走り去るを爲朝ね物の隙より見そおねーて。されべこそ妖怪なれ逃とも逃さじとて弓矢を手挾み追蒐ねふふ彼ね駿ぎさる氣色もおくいと徐やかふ行やうおまどそ。その疾と馬の馳がどくいかふ追ねへども間ちかうも追つかれぜ北良の峯方も打過て南小松と北小松の間なる楊梅の瀑布のかとりふて忽地彼男を見うしをひねひつ。こは朽をし遠くも隔らざりーふいづ地ふか身を隠しーけん彼が栖ね正しくこのあたりおめりとおぞーて。彼此を見かへりねふふ瀑布の左手ふをこー坦地ありて。ふりたる榎の枝葉生茂れるあり彼もーおの樹蔭おどふ躁れ居る事もやとて芳萱踏ま充入りねふふ猛然として彼男榎のまへふ立あらねれ半弓驚設て抨と發つ矢過ぜ御曹司の面上ふ飛来るを。身を背て避ねふふ矢ね腸ふ丁と立を立せもおかぜ捧捨彼は矢坪をたがへて大ふ憤二の矢を刻んとをるところを爲朝よつ引て射ねへば鳩尾骨碎てぐさと射徹ー鏃あまりて榎の幹へ一鏗抗て縫さりける。されど彼ね頻ふも死おぜ手足を悶掻て脱れんとを爲朝これを見ねひて弓矢をむ戛離と投捨太刀抜挿頭て走りかゝり首を磯と切ねへべ俄頃ふ山鳴り瀑布浮騰風又颯とおとー来て木の葉を飛し砂を巻揚四方晦然としておばーね物の善惡もヨかぜ。この時しも藤市ね御曹司の事心もとをけれべ蕉火ふりてらしてその迹を蔡来つぞゝ風れさまりて後走り著おの光景を見てうち驚充つゝもまづその故

を問ふ爲朝ハ今あの妖怪を射とめたる首尾を說示しぬふ藤市これを聞て。おそる〳〵蕉火をかゝげて。も袴とも1見れバ五十ばかりの男とおもひしハ身丈一丈3あまれる獸3て針のゞ如毛班3生出手足ハ漆を塗たるやうに黑くて爪の長二寸3及べり。首ハ遠3飛て右手ある鼻角3鹽著たるがその面狙に似て狙3異なり頭ハ毛ハ雪のゞく白くて長二三尺もあるべく脣厚くあて鼻を掩ひ口ハ方3裂て尖た牙あり既に死を

といへどもいまゞ目を閉ず瞳の光人を射てさゝがら生るが如し爲朝よく見をハりて。

おもハ何といふ獸ぞらんと問ぬへバ藤市答てそれがしむかし山樵3夥の年月をあくりしかどいまだかゝる獸を見ぎこに世3いふ山猿ぞらんかといふ實有左ものゝそ故が栖を見究めよと宣ひて藤市とともゝ榎の背3到て見ぬよ3果して一ッの洞ありけりその廣輙く人を容べしやがて裡3入りて見ぬへバふかさ拜七八尺3過ぎして。裡3ハ獸の骨を堆高く積置又錆たる錢居多ありて土3著けるハ朽虧たるもあほし便藤市3仰せて錢をバ外面へ運び出させつゝ宣ふやうこの妖怪毎日3獸を射ころして。肉ハをのが食とおし皮をバ我が家3もてゆきて鬻たるものゝそその皮3鏃の疵あかりしハ彼かぞらぎ眼3射當たるぞらん向3彼が射つる矢のゞが面上3飛來ぬるこてを

れり。もし尋常のものぞりせバ忽地眼を射らるべし。そも何をもてか弓矢とハぞしつらんと宣ふ3ぞ藤市も仰疑3ぞかりと回答てその弓矢を拾ひとりて見せまゐらせる3。弓ハ黃櫨の幹3竹を合せ藤蔓を卷て作ぎり矢ゞ又獸の骨を削たるものとおぼし。これらハミな燒捨よと仰ぜれば藤市こゝろを得て山猿が首をもひとつ3寄せ柴折かさねて是を燒捨軀ゞ皮を剝とりて錢を裹み藤蔓もて束ゞ脊負こハ思ひもかゞ不ぎ得つ死たりとうち笑へハ御曹司も咲坪に入りてこの事人3ぞらぎべからぎ。わがあの妖怪を輙く殺せりと聞えゐば。かゐらぎ怪しめられて身の大事3及びゐん。あゐかしこ秘をべし〳〵と宣へハ藤市げ3と點頭て共3家路3赴死けりさる程3爲朝の矢疵その夜俄頃3痛み出て。いとも堪がたく見えぬへバ藤市うち驚きて疵口を洗ひ毒を去りて膏藥を附まゐらせゐどもれども速3ハ愈べうもあらぎ。かゝる金瘡3ハ石山の與ある溫泉3入りぬハゞ日ならぎ平愈あらんかと藤市が申ス3まかせをこしおこたらバ彼處3赴きて保養せんとぞ宣ひ不る。こゝ3又藤市が甥3武藤太といふものあり爭彼幼稚て父母を喪しかバ藤市養ひとりて己が子とし片田の浦ゐる家家3つかハして小厮とゐし死つる3ゐの三年あまり前3路主人の錢ゐ盜こてみゐ淫酒の爲3用盡せし事發

覺主人大に怒りて武藤太を叱直に藤市が家に預速に彼錢を返し納よと責むもしこの事等閑に閑は官府に告訴たてまつりて武藤太にさらおり藤市にもから死め見せてんといへり藤市これに迷惑しからうゞてそは債を償ひ武藤太をべ勘當して忽地に追ひ出しけり。かくて武藤太は京浪速を徘徊しあしき友のみと交參て賭をこのみ酒を嗜みあるとき死にあるはまかせて明日の貯をあもはず。おきときにな死がまゝに物を借りて返さ事おく世をわがまゝに渡りしが近來うちつゞきて賭に屑さをがに邪智も用る處おかり者ん阿容々々と荒川へ立ゐへり。ひがうへをべふかゝ匿して只顧前非を悔たるおもゝちし村長おどをゝのみて藤市に陪話たりけは藤市えはゞめの程にさらにうけ引ざりしがつく〳〵とおもふやうこれかく老くたちて兒といふものもあらざるにもしあはまゝにて世を辭らべ誰か心よく後の事おどをも經營べきこが朔志を更るに于ても大ある幸なり加旃御曹司の湯治おぬにんに彼を召俱してゆきぬにゞよ袴づ便よかるべしと深念し陪話らるゝ事おば〳〵にして遂に勘當を許しおゐ向後を誡てその行ふ所を見るに旦に朝まだきに起て夜に子四過るおろまでえ寢ぎいと真實やかに勤止しかべ藤市や、安堵くまづ爲朝にもおもふ程を告まゐらせ有一日武藤太にいへりけるに近曾こが家に在をるにむかしこれこかゝりし時ふかく恩惠を棄たる人の子おり此度所用ありて加賀國へとて下りぬふ折しえ俄頃に路に病てこが家に立より。おべし保養しぬふおるよりて石山の與なる温泉に入りぬはゞよろしかるべく思へどもこれに生活に違おくて從ひゆく事のおにもぎ汝これにかにりて彼處に赴きよく心を用ひて勤りまゐらせよといへべ武藤太一議にも及べず參るべしといふこの時爲朝は矢痍をこしおこたりて歩行もやゝ自在おりしかべ次の日武藤太を將て石山へ赴き七日べかり湯治おぬよにいまだ全く愈をといへどえ湯もやゝ相應せりと見ゆ武藤太はあゝに到りてもおほ信々しく勤り進らせつゝ竊におもふやうこれ洛にありしと死世の風声を死くに鎮西八郎爲朝を搦捕て出すものは忠賞拔羣おるべしといへりこれ彼人の擬樣を見るに身丈に七尺に過て面魂凡人おらぎ。又そのおをところを見るに農業商賈にえはおはだ疎し且こが叔父むかし恩を棄たる人の兒おりと稱して。これを管待は事さおがら主君のどし彼これおもふにこ社人爲朝に疑おし。これ今告訴して過分社恩賞に預らば福貴こゝろのまゝおらんとふのくよろおび思ひおがら楚見究さる事もおくて。人たがへせべ毛を吹疵を求るおりとやせましかくやせまゞとおばし躊躇しが。

佶とこゝろつく事ありて爲朝の湯に入りぬふを窺ひ湯桁ほとりにゆきていふやう。凡湯治をる人按摩して經絡怨地に整ひ功驗速おりと聞り浴おぬふと知おどるにおほよろしかるべけれ。さらば肩癖をも按ほぐし垢をも流しまゐらせべうもやといふ爲朝ね心も内知ぬねぞ。その真實おるをよろこび聞えて彼がいふままかせぬふ武藤太ねおばしその肩をもみて退出つゝ竊に笑を含み彼爲朝ね左手の肘右手に四寸伸て矢束を引と世に超たりと聞ゆるがわれ今敵人を按摩をるとき。その肘をよく見れば果して左手ね右手より長しかゝる證據のあるおれば更に疑ふべからぞと既に心ね決しおがら。色にも出さぞ詰朝又爲朝にいへりけるは。それがし曩昔の夢に藤市が病ふしたるを見てひへべ。何とおく心安からぞ。よりて今日荒川へゆ知て安否を問やがて立かへりひねんとて誠おやかに告しかば爲朝は誑らるゝともおりぬねぞ老たる養父を家に置べさおもふもとはりこ疾ゆきて緩やかに締りひへと仰をれば武藤太よろおびて忙しく走り去直に領主佐渡兵衛尉重貞が館に到りてありのまゝに告訴けり重貞は武藤太が告旨を聞て家隷郎等ねさらこ俄頃に三百人の土兵を催し集め武藤太を案内とし〻石山の浴室を縮麻竹葦にとり圍せ力士十五人を擇て態と太刀をべ持せぞまづ武藤太と、

もに潛にをゝみ入らせける。この折しも爲朝ど浴して在せしが武藤太つとまいりて只今おへりひといへべ爲朝は思ひの外ねやのりしと宣ひて湯を出んとしぬふとき。十人手組して群々と寄せあふたり爲朝佶と見ぬひて。おゝろ得たりといひもあへぞ。三人を搔絢。吭締て捨ぬふ殘る七人左右より矢庭に組んと鬪を忽地二人を丁と蹴殺し。又近よるをべ湯桁に押當首ふつと捻切捨或ね拳して打倒し足にかけて踏おろし。一息吻て立ぬへべ血ね流れて溫泉を染屍横ねりて累々〻り爲朝ね既に武藤太が告訴おつるをおりぬへば。まを〳〵憤に堪ぞ。これを費りて榮利に走る其愚者迚も迚さどといきまねて走りかゝらんとしぬへべ武藤太大に怕れて浴室を楚と鎖し彼甚勇力ありねやく火を放て燒殺しぬへと呼けれべ爲朝奮然として浴室を打破り柱一本かろげに引拔武藤太を打拗んとて追蒐ぬふを待設たる重貞が家隷ども蒐隔〳〵。これ組留んと競かかる爲朝事ともおぬねぞ彼柱をふりまねして打殺し敵伏縱横無礙に働きぬひぬれど。矢疲いまだ愈ぞして合期ならざる時節おれべ。おべしおをありけれ。やうやく臂よわり。勢力究りて不意撲地と倒れたまへべ夥の捕夫走り寄是おれ取つき腿かゝり。いやがうへに打累るをおほ卧つゝも打退蹴返しぬひしかど五指のおねる〳〵彈んより一拳に

あかず。小は大に敵しがたけきゞ終ゝ生拘られぬへるぞうたてし。扣この日爲朝一人を搦捕らんとて打殺さるゝもの三十餘人傷つくもの五六十人ゝ及べり。まゐて湯治の爲とて居あわせたる老幼男女わ駭き怕れて逃まどひ。踏かへされ壓たふされて。生死をあらぞ重貞い爲朝を搦捕てふかくよゐこび。やがて内裏へ引てまいりければ彼わ音ゝ聞ゆるものおり嚴覽あるべしとて。周防判官季能これを受とりて。白き水干袴ゝ赤き帷子を被せ髻ゝ白鞦をさゝせけり。主上(後白河院)わ北陣ゝて嚴覽あるゝ公卿殿上人わさらおり。おれを見るもの駭然として舌を卷賞この爲朝わ凡人ゝあらぞ身丈の高やかなる筋骨の逞しげなる。あかも重瞳ゝして。ゝが國の項王ともいふべし。この人もし矢疵ゝ惱る折ならぞわ縱千万騎ゝてもむかふともも輙く搦らるべうもおぼえぞおどさゝめきあひぬれど爲朝わをゝしも聽せる景色おく自若としておわしける。されゞ重貞え此度の功ゝよりて左衛門尉ゝ補せらき。こよおき面目をほどこせり。

椿說弓張月前編卷之五

鎮西八郎爲朝外傳

東都　曲亭主人編次

第十二回

琴彈神社ゝ武藤太美ゝ逢　觀音寺村ゝ白縫女仇を殺

かくて爲朝わ使廳へゝたされぬひて謀反のやうを問るれども。何事をか申べ扣。とく首を剄られひへとのゝ回答して。おかゝゝゝ潔く見えぬふ當下公卿僉議ありて。彼をゞ死刑ゝ處せらるべき歟。また配流せらるべき歟として事決がたかりしゝ少納言入道信西班をゝゝみ出ていふやう此度の合戰ゝ御方の兵士多く命を隕せしわ爲朝一個の所爲ゝして。八虐の凶徒あり加之内裏高松殿ゝ火を放て御所ゝ矢を進らせんおどの罵たるよし。おれ君と射奉りしゝ等くその罪重して偏ゝ顯戮の制度ゝ及ぞ死罪に行ぎん事勿論なりとゞ憚るところもおく述ゝけれゞ關白殿(法性寺忠通公)宣ふやう爲朝重科逃れがたしといへども。ひとりその場を逐電して。今まで身命を有たるわ實ゝおれ天命といふべし。しかれば死罪ゝ及がたゞ歟。又彼ものが弓箭ゝ長ぜし事上古ゝも例おく未せゝも有がたからん。かゝる勇士を忽地死刑ゝ行ひおゞ後代の謗を慝ゝ似たり。倘

また先非を悔て野心を轉ずる事あらば朝家の御寶おるべしおど理を盡して宣ひしかば。諸司百官これに從ひあいれめてたき仰かおさらば遠流に處しなへとて伊豆の大島へ流しつかはをべきまで定らる信西は衆議の一決せしを聞ていと遺憾はあれどさすが關白の仰に恃らんやうもおく只此うへは幾朝に仰て彼が肘の筋を斷せふたゝび弓を引さぬやうに致べしとてやがて如此はからひしがおほ心もとなくやあるけんその のち関白忠通公に申をやう爲朝既に肘の筋を斷るゝといへどもおゐ忍に致がたし。倘路次に于て不慮の過あらん事もはかりがたければ伊豆大介將野工藤茂光を召のぼし。彼が手の者をもて嚴しく守護せさせなへかしといと信だちて聞ゆれば關白殿諾おひなひてやがて茂光を召ふこの時武藤太は恩賞を乞ん爲に荒川へもかへらを佐渡左衛門尉重貞が手よりつれて洛へのぼり旅宿にありてもつぱらその便宜を窺ひつゝ爲朝既に遠流に處せらるゝ聞て有一日重貞が許にまいりて申けるは。それがし養父藤市にもつかを輙く爲朝を生拘らせ進らせたれば。その功莫大おり。あれ過分の恩賞に預らばやとこひねがへば重貞聞て思ふやうこの武藤太は忠もおく孝もおく。おのれが榮利をはかりて養父の舊主を告訴せしこそ世にも稀おる愚者おれ憎さもにくしと思へども。今これを賞せをは。かさねて謀反の徒あらんと訴告するものおからんかと思ひかへし。もおは百貫（今の百金餘）の賞錢をとらせけり。武藤太こを不足して。彼鎮西八郎は萬夫不當の勇士にて名〻ゝる軍將たちも討漏しなへるを故おく搦とらせ進らせしから武士にもおされ一處難命社地をも宛行るべきかと思ひの外これはあまりに當がた。彼御はからひかおとつぶやけるを重貞聞て憎き奴かおもしそを事にて事足らをは一錢も與ふまゝとて氣色あしく見えしかば武藤太怕れてふたゝびいはを彼錢をなりて遁るがごとく其處を退彼錢をば金にかへて懷にし遂に近江へ立かへりて荒川の鄉に到れば忽地鄉の壯佼二三十人彼此より走り來つ手に〳〵棒を拿て遮とゞめこの愚者何の面目あつてかへり來れる汝が筑紫の御曹司とやらんと告訴致せし事その夜のうちに聞えて藤市は只泣に泣あかしおゐたのびがたくやありけん次の日梁に縋を締下忍地縊れて死たるおりその折しもよく情由を去るもの、語るを聞くに彼御曹司は藤市が舊の主君にてあり給るとぞしからは是汝が爲にも主君にひとしかるべ彼を憎おくも告訴して搦捕らせ剩その故をもて養父を非命に死せしは五逆とやいはん。十惡とやせん。あら憎や彼擊よ括れよといきおきあらく罵ゐて打倒さんと競ひかゝ

れば武藤太呆きて一言のかへしもなしはを滿面赤くおり青くなりて鼠の逃るがごく逃去りつゝふたゝび洛へ上りしかど。人みな彼が不義不孝を憎みて。かさねて宿を貸ものなく路に行あふものゝ面あたり罵ゝ詈かしめ或ゝ礫を打かけて劫しおどせし程に。洛にも足をとゞめがたく直に浪速を投て下りける。此ところも武藤太が嚮に權く遊びし地にて。あれる人もれほけれど洛ちかきをもてはやく其情由を傳へ聞これを憎む事洛にも過たれば。とかく西國へ赴きて世を安くこたらばやと尋思し路次にて稠あらんことを害怕。やがて船に乘らんといふに人みな乘合を許さねばせんをべおく陸を下らんとそる折しも途に丈五丈六といふ同肥の船人に行あひぬ。この丈五丈六ゝ武藤太が浪速に住りしとき隔おき友おりしかば。まづわがうへを物がたり。金二三兩を與へて船路より下らん事をたのみける。しかるに件の兄弟ゝ元筑紫人おりしが故舊まて人を殺し。浪速へ逃來りて海船を傭乘おとし内。世をこたる無頼の惡徒なれば一識にも及ぶ容易くうけ引て俄頃に一艘の船を借出しいと叮寧に管待にぞ武藤太ふかくよろおびて西國にて奇しかるべき物を買とゝのへて船に積せ。その夜の中に船出して西を投て走らるに丈五丈六ゝいづれの港へよせんと問武藤太答て筑紫ゝその繁花洛にも劣らぬと聞り。これ彼地へ赴きて活計をおもべく思へば其處へとて違りゐへといふ丈五又いふやう筑紫にこが故郷なれども憚る事ありてゆきがたし長門社赤間關ゝ富人も多くて世をこたるに便よ紀湊ゝ赤間へ赴きて商賈をおしゐへおど相語つゝ追風に真帆を揚て走らせしが忽地風吹かゝりて逆波天に衝波海かおふべうもあらざれゝからうトて讃岐なる水崎の室に歇船して日和をば待合せける。武藤太ゝいまだ四國に遊びし事もあらざれば。おのゝわたり一見せばやとて。ひとり岡ゝよりあがり終日彼此を徘徊し て。やゝ暮なんとそるこ彼舊の湊に立かへるに觀音寺村といふところよりゝ二三町おゝに琴引の八幡宮たゝせゐへり。おの處の眺望蒼海ゝ天と一色にして去備の國々塩飽横木の島々只晨眼下に涌出をるどく右に有明の濱あり左に川湊あり。詩に耽り謌を咏むにもあらねど徒に過おんゝ杓をし道の次に詣ばやと思ひて彼神社へ赴けり。おの時日も既にくれぬれど頃しも八月望の夜にて神社ゝ南に向り月も出なばいと明かるべ紀に畫より天結陰たれば。させる眺望もおく詣る人もあらざれば武藤太ゝひとり廣前に額つきてかき口觀やう抑神ゝ凡夫の邪正を監み賞罰過とおく應驗强おしとかやおうるにそれがし國の爲に朝敵爲朝を告訴し佐渡左衛門尉重貞に捕搦せたれば

東京神保出版社

その忠揭焉その功灼然おり。おゝゝ重貞心さま鄙吝まして恩賞その功に當らず人の勞を盜をておのれが得とを世の人これを曉得ぞして却て武藤太を憎む事讐敵のごとく。住なれし近江はさらゝ京浪速ゝも身をおく宿おく西國を投して赦出せしに。又風難ゝあふてからきめ見たり神明もゝ王が薄命を憐みねゝゞ禍を轉して福を與へ富貴こゝろゝ任させねへと自の奸邪をは思ひもかけぞ。人をうらみせをゝかなこゝ齊高ゞかゝ祈請ける時ゝ海上雲おさまりて玉兎高く昇金波潮ゝ映ゞくさおがら白晝のごくおるゝ高欄のほとりゝ當りて忽然と琴の音聞えて

山越乃風乎時自見寐夜不落家在妹乎懸而小竹櫃

と万葉集第一ゝ載たる雄略天皇讃岐國ゝ幸ませしとき軍王が作れる歌をくりかへ〳〵聲いとおもしろうたひ出たるゝ調又妙おれゞ磯の松風もおれが爲ゝけおされ浦の千鳥も恥て音をゞとゞめおん歌のこゝろはあらねども武藤太ゞゝへて詰刈る人おゝと思ひゝこゝ神か人かと疑ひまどひ欄のほとりゝ立出て見れゞ年紀二八ゞかりおる美女の都ゝも鄙にもあらぬ打扮して縹縑ゝ紅の裏せし袷も虛燒の熏むへ得おら月の眉の艶なる柳腰のなよゞかおる麝ゞ櫻の枝ゝ海棠を咲せて芙蓉の色香をこめたるゝ異おらぞほとりゝはゞかるべき從者もおくて女童只ひとりおん侍りけるゝ真菅の筵布まゝゝ月ゝ對て筑紫琴操將せる光景ゝ天津少女ゞ影向ゝ本ん龍宮の乙姫の人間ゝ遊ぶかと疑れこゝ沼も蕩魂も消るゞかりゝおぼゑしかむ忽地驚然とうち笑ひこゝ心も得ぬ獨ゝ詰しと却ゝ見えねゝざりつるゝいつの程ゝかまゐりねひゝ今宵の月を只ひとり見ん事のいと惜く思ひたるゝこれゝひとゝき人もありけりと真だちていひかくゝゞ彼美女ゝ含咲つゝ琴かいやりてこらはゝこの夕ぐれよりこゝゝあれど月まつ程の暗けれゞ得おらでおゝゝけんといふゝ武藤太ゝ胸うち辨却詐たる回答せゝ田舍人と見すかさゝて笑ゝるべし。とやいゝん。かくゞ答んとて襟ゝ却あゝせおどきれゞ只顏のみ赧うなりつ寔ゝ宣ふどゝとぞ回答ける美女又いふゃう見まゐらきれゞおの國ゝ旅ゝして洛ちかう往ねへる人とおゞゝこらはゝ觀音寺(琴引より二三町ゝ過ぞおの寺四國八十八ヶ所のうちゝして第六十九番ゝ當れりよりてその地社字を又觀音寺といふ筑紫の觀音寺と混ぞゞ(からぞ)のあおたゝ往むものおるがふかゝ願事ありて夜毎ゝ詣侍り殊さら今宵ゝ三五夜中の月も隅おしいそぎねゝぞゝ。もゝとゝ語りあかゝねへといふ。あまりゝ隔おく見ゆれゞ武藤太ゝいよ〳〵鈍まゝと

て。こゝにおあたよりぞ樹ふべき。かくとゝらば酒おどをも用意をべかりしに船までゝ遠くもあらぬを走りかへりて買もて来べしといふを美女押とゞめて。君は今宵の賓ざ孤に在もれば。こらゝ東道し侍りなん。船をばいづれの湊にか歌ゐひしと問武藤太答て。こが船ゝ水崎にあり外に乗合の旅人もおく船人の丈五丈六といふものゝ心ありたる友おれば継翌あさてまでおゝに居るとも妨ゝあらぬ十六夜にはかならぬ待かへし進らをべしといふ間ゐ美女ゝ彼女童が耳に口をよせて。何事やらんゝば私語ば女童ゝこゝろを得く觀音寺のかたへ走りゆきぬ。さし對ひてゝいよ〳〵はおゝろみて互に言語もおく武藤太ゝ膝のあたりにおく〳〵とふるひ出て立もやらぬ居もやらず。こりおくよりあんとをれども高紀にこゝろ臆して。いひよるべうもあらぬ美女ゝ琴引よせて。前よりもなほ妙に奏づるを武藤太ゝそれにこゝろもとめぬ。とさまかうさま思ひたゆたひしが。今ゝ志のびかねて背向より帯の間へ手をさし入れ。やをら引よせんとをる折しも彼女童ゝ一人の女使とゝゝに提偏拉擔てかへり来るに序あしかりけりと走り退つかくて美女ゝ彼提偏をひらかせて。只管に勧し程に武藤太も酒おくてゝいかで惜を引くとあらんもおもひて。ふかくもいろハぬ盃の数もやゝかさおりて顔をば狙猴のごとくおしつゝ高く笑ひ低く唄ひ。餘念おく見ゆるを。女ばらゝかゝる〳〵手をとりて。いやがうへに盛にければ。それにもあらぬまでに醉ふして忽地前後もあらぬおりぬ。さる程に武藤太も暁ちかくおりゆくころ。秋風の身に入るにたるに驚き覺て眼を開けば琴引の神社にもあらで。見も馴ぬ孤館に。只ひとり打臥たれば。こゝいかにと疑ひまどひやがて身を起して見かへるに次の間にゝ燈燭あまた点して。人のさゝめく聲す。こゝゝそもいづ地にて。いつ社程にか来たりけん甲夜の事どもを夢かと思ふに夢にもあらぬ淺ましや。それゝ狐狢おんどに妖されけん。おのらば飲せし彼酒も馬の尿に疑ひおしとこゝろつけてゝ去ばしゝたまらで。直に吐べうおぼえつゝ吐もやらぬ膝を組手を叉さ忙然として居たりける。浩歎に以前の女童次の間より出来りて。今ゝよく醒ぬひけん。あるゝ君の待ひぬゝとくおあたへとて誘引にぞ武藤太ゝまを〳〵こゝろ怪みその後方に つきて次の間に到れば彼美女かひ〳〵しく打扮て上坐の床几に尻をかけ。八九人の女使ども一帯に居おらびたり。その光景只今起程がどくおるをいかなる故とも思ひもたまへぬとかくまうすゝみ得ざるを美女ゝ叮寧に迎請て蒙爾とうち咲み賓ふかくおぬ怪ぶひそ甲夜にいたく醉臥ぬゝを。もて驚しまゐらせんもあゝろなきに似たれば

女子どもゝ扛せて。ゝが斧ゝ伴へり。おらせぬふがどく嚮ゝに物詣の折ゝして。させる管待もせざり。こゝいとかほけ紀物おれど家裏ゝおゐへといふ間ゝ女使二人坐を立て巻絹やうのものを夥もて出たり。武藤太はおそる〳〵政よりて。おの引出物を見るゝ商賈の爲ゝとて。ゝが涙速より買もて来つる物ゝよく似たれど明白ゝも問かねて淺からぬ恩惠の程をよろこび聞え手ゝもとらでうち出もり居れば美女又女使ゝ對ひ賓のいときみしげゝ見えぬゝ酒をまゐらせよと仰れば此度ゝ三人ばかり齊しくたちてまづ盃銚子をもて出て武藤太ゝ勸るを。おは〳〵辭すれども許さねば已とを得ず盃を擧るとき二人ゝ女使おの〳〵敬を携出てゐとりちかう閣を見るゝ彼丈五丈六が首を剄て折敷の上ゝ居たゝば武藤太おもはず盃をとり落し。戰慄てせんすべをおらぜ。あらふる神の名を唱て助ぬへ〳〵と叫びけり。當下女美儼然として言語をあらためやをれ武藤太怕るゝ事おかれ。ゝらはゝ汝ゝ告許せられて羅織の恥辱を受ぬひ。爲朝の妻白縫なり。いぬる廿三日の夜宰府の城を菊池原田ゝ攻られて。ゝが父忠國も討死しぬひしかど父の仰の重ければ。一ゝたび御曹司ゝ環會まゐらせん爲女使等とゝもゝ圍を切脫遂ゝ八町礫紀平治ゝゆきあひて。舩路よりあの讃岐ゝ漂泊し。ふかくこの處ゝ縣樓て外おがら新院の御衛ともおるべく思ひ。又紀平治をば洛へのぼして潛ゝ御曹司の往方を索させたるゝ。四五日以前彼八町礫連忙しく走りかへり御曹司ゝ重病を棄て石山の輿に湯治おぬゝ日從者武藤太といふものゝ告訴せられ佐渡重貞が手ゝ搦捕られぬひしと告たる時ハ朽をしくも淺ましくて。かゝる歎をせんよりハ君ゝ先たちて死すべく思ひいくたびか刃をばとりおがら紀平治等ゝ諫られ已とを得ず必死をとゞまりおほ御曹司のおりゆきぬゝ果をおらん爲ふたゝび紀平治を洛へのぼし。ゝらはゝ夜毎ゝ琴引の八幡宮へ參詣し夫の命惡をからん事を禱る折しも汝も又彼神社へ詣しゝ。ゝが籠り居るをおらぜ。ゝづから姓名惡事を稱て。人を恨み世をかおちたる氣憎さ更ゝ比ふべうもあらぜ。おかるゝ汝ゝが法樂ー奉る琴の音ゝうち驚きて欄のゐとりへ退り。ゝらいを見ておめげゝも淫紀心を發したゝば酒を強て醉臥させ潛ゝこゝへ扛せかへり汝が隔おき友へと物かたりしをもて。まづ丈五丈六とやちんを生拘采りて責問ゝ。又こゝ拘黨の兇賊ゝて。その身の舊惡汝がうへ藤市が事迄おちもおく首伏せーのみおらぜ御曹司ハ伊豆の大島へ配されぬふべ紀ゝ定り狩野介茂光が上洛をまちて彼處へ下ーぬゝといゐ。おからばゝらハ晝夜をゝかぜ走上り中途ゝ于て御曹司を奪ひとりまゐらせ

東京稗史出版社

んとて。かく行装を整へ。遂ゴ丈五丈六が首を切て。まづ汝ゴ示をものゝ。うれし紀かな今宵不意も仇ゴ逢て夫の存亡をきれると碧田の神の冥助ゴして。おほ久後もたのみあり。汝既ゴ養父の主君を告訴し。又その故をもて養父も非命ゴ死さりと聞。その罪大ゴして軀ハ竹の串につらぬ紀首を木の杪ゴ梟るとも飽とおゝ況ゴの時ゴ當りて。その首を携ゆき御曹司ゴ見せ奉らハいかに歡びなゝらん。とく〳〵彼を獲まと仰せれば武藤太まもまは慌忙それがり金く御曹司ハ養父藤市が主君おるとをきらも。人ゴをゝめられて告訴いさせー事。悔れどもそのかひおし。只ねがハくハ許なへ。といたせもあへも女使二人左右より犇々と寄せあふを。飼たふーて逃んとをれども。おの女はらさへ擊剣拳法ゴや達たりけん。思ひの外勇ーて些とも動せも手とり足とり赤裸ゴして。忽地椽の柱へ麻縄もて楚と括著左右の手首をハ前のかたへ拖伸させて。米おす懷劍を抜出し十の指をひとつ〳〵切落し切おとせば鮮血滾々とおがれ出て十條の赤泉濺るとく。又梅液ゴ流たる生姜ゴ似たり武藤太ハ只管苦痛ゴ堪もして魂消ぱゝり號哭を速ハも殺さも。又二三人の女使五寸あまりの衍劍を數十本もて来り大やかなる鎚をもて。右手の腸へ打ゑめハ武藤太高〳〵噫と叫ぶを。又立かハりて左手の肩へ丁々ハつしと打こめハ武藤太ふゝ〳〵阿呀と叫ぶ。或ハ太股或ハ臀。癸所を除て打劍ゴ死んとして死もやらも活んとをるハなほ難く。正ゴ叫喚大叫喚の呵責の劍も數そひて。苦痛の聲も霜ゴ鳴虫のとくゴよハりゆゑ因果劍覿積惡の報の程ハ去りつらん。今ハ足までぞとて白縫ハつと身を起して懷劍引拔武藤太が首打おとして。その衣服ゴ裹せ軀ハ夜のあけぬ間ゴ。この海づらへ押おがしてよと仰せつゝ。一人の女使と一人の女童を殘しとゞめて菴を守らせ。八人の女使を將て大刀を裝のうちゴ卷こめ。おの〳〵こ主を脊負せつゝ。武藤太が首をもたせ田婦山妻が伊勢の大神ゴ詣るとく打扮て。この曉ゑ誰彼時ゴ。えをハなるゝ島とともゴ東を投て旅だちける。嗚呼この女丈夫美ゴして烈勇ゴして謀ありそゑ讃當ゴ形名が妻の右ゴあるべし。

第十三回

爲朝伊豆の大島ゴ配さる
白縫大ゴ千貫の旅館を鬧を

伊豆大分符野工藤茂光ハいぬる八月上旬ゴ。ゆそぎ上洛致をべきよしの仰を稟とるものもとりあへも。夥の家隷を將てれおゝ月の十五日ゴおいりしかぱ源爲朝を伊豆の大島へ配流るゝの條路次もつとも心を用ひて召俱をべきよー周防判官季實ともつて仰

ちる茂光勅命をうけぬゐりて聽て爲朝を受とり既に歸國せんとはは折しも少納言入道信西潛に茂光を招き。何事やらん相語つるをおるものたえてなかりけり。おかるに爲朝ゐ朝ゐ肘の筋を斷ち手綱をとるに及ぬゐねば。牢輿を造りておれに乘せ四方に轅をとたして轅夫廿餘人に昇せ。その手の郎等五十餘騎前後左右に立こみつゝ茂光ゐ後陣にうたせて馬上勇々しくぞ見えたりける。されば名たゝる爲朝を見んとて老幼彼此に群集ひて巷ゐ押もとけられぞ。おかれども爲朝ゐ輿のうへに端坐して。物見より顔をだに出しぬゐねば楚と見とめたるものもなかりけり遙けき東路をけふとくらし翌とあかして扛れゆ死ぬふ路をがら茂光が郎等に對ひてこや汝等もよく聞け。人のおがさるゝいさこそ歎くめれど爲朝ゐこよおゐ歡びこそかゝ帝王にもてあつかゐれ。輿に乘せ兵士を添茂光に供とさせて配所へ赴かゝぬふ事寔に身の面目おちぞや。おかるを汝等われを罪人おりと侮らば。よき事ゐあらば掛畏帝の御威德おればおそ爲朝ほどのものが普通の凡夫にた生拘られけめ。よしや肘の筋は斷離るゝともこれに于て損おし弓こそ少し弱くおなれ。矢束ゐおほ長く彎べうおもへば。物の徹らんゐはじめにも勝れり況かばかりの輿は物かゐ。おれ見よとて少し手足を伸しぬへば。さしもいかめおう打付たる牢輿の。今も破碎るやうに搖ぎこたりつ。又やと斧振かけて押をぬへば。廿餘人の轅夫ども肩めておみて動き得ぞ衆皆もてあまして。只その怒りぬゐん事を怕れ主君のどく殿み賓のどく待ゝゆくに日を經て駿河と伊豆の封疆おる千貫の鄕に歇りぬ。

是より茂光が采地も遠からざるに頃しも九月上旬の事にして。この夜風雨烈しかりければ守護の士卒も懈るとにゐあらざめども故鄕ちかゐに心緩みて長途の疲勞に熟睡せり。不題白縫ゐ。八人社女使とゝもに只管路を走りて洛に上り潛に御曹司の事を問ふに將野分茂光が預りて一昨の日東へとて下れりと聞ゆれば。こゐ後れぬる悔しさよ。ならばおほいそげとて夜を日に繼て追蒐たり。茂光ゐ夥の士卒を領て下れば路も果敢どらぞ白縫ゐふそぎに急ぐ程に三河路にて追つゐたれど。おかるべき便もおくて黙止せしが。今ゐい川までゥくてあるべき。今宵社風雨に紛れて謀入るべしとて。よくその暗號を定め夜の更るをまゐ程に丑三のお伽に至て雨も少し止に不れば主從九人眼罩に面を裹み。おの〳〵燈罩仮点しつれ。茂光が旅館に潛よりて窺へば。あやしやこれに先だち塀仮踰るものあり不りこゐ盜賊にこそあれ。彼もし過て人を驚さば。こが首尾を喪ふべしとおもふ一つ白縫よく見をまして丁と打銃銃仮刀の鞘に受とめたり。ゐゐ迯さじと

て女使二人走りかゝりて左右より跌拿て引下れば。ふり放つとて踏ねづし忽撲地轉ぶつるを押へて索反かゝんとせれども。ほとりへも寄せつけぜ手首飢て突退く。ふたゝび塀へ手をかけて乗らんとすれば白縫ゑ見かぬてみづから癖者が刀の稲妻楚と拿るを攝拂ねんとて見かへる面へ。さゝ付る火光よりてその人を熟視るに八町礫紀平治おれば豆まこねいかまとうち驚きまづ縁故訊問とねるゝ白縫ね嚮はからぜも武藤太を殺して寃を雪め。又文五丈六が首伏せしをもて。御曹司伊豆の大島へ配流されぬゝ事をおりて盜み出しまゐらせん爲まこゝに追来り今宵志を遂んとをる顛末を竊に聞えぬひしかば。紀平治聞て脅を低うし。それがし前日ふたゝび洛へ上りて主君の安否を探り問に茂光おれを預りて明日伊豆へ下ると聞事急おれぞあらせ進らをるに遑あらぜ。直に見えかくれに付添来て。その隙を窺ひ盜み出し進らせばやと思ひおがら。敵ね多人數。されね一人爲損じてねとたゆたひてかる〳〵しく事を發せず今宵おそと思ひ定めるに不意もこは處まで落合奉りしね主從志を齊し事を成し得べき前發へそまがしまつ入りて。裡の容子を窺ひひゝんといひかけて。さら〳〵と塀を乗踰ぜゐて門を開れしかば衆皆よろこびて。おか〳〵に憚る氣色もおく足音高く亂れ入り戸を打碎れ刀尖を

揺て慕直に突てかゝれば茂光が郎等あの脾馨に驚れ覺ね夜討ありと呼ねりけゝ弓よ太刀よと罵合騒忙て走り出ゐを是首の物蔭彼首の挾間に待うけて矢庭に切伏せ薙たふし主從十人劣らぜ勝らぜ粲然としてかけめぐれば敵の多少を見究得ぜ茂光が家隷どもかおねどとや思ひけん窓を壞牆伐破り七零八落に逃うせたり。今はこゝ爲易し御曹司ねいづ處にか在をるとて白縫は紀平治等とゝもにおほをゝみ入りて見ぬゝまおくまりをる客房の中央に牢輿伐昇居て守る人さへあらざれば。娵しさ比べんやうもおく扶出しまゐらをるに輿の裡おるねその人にあらぜして。いまゞ見も馴ぬ男おれば白縫紀平治はさらに衆その面をさし覗れ。うたがひ惑て動容めけり當下紀平治は彼男の衣襟かい飢み刀尖を胸のあたりへ突つけて汝ねおれ何ものぞ。又御曹司をば何處にか置まゐらせしとくいへ。もしいねぜねこの刀を得おそ引まじけれと責問べ件の男おそる〳〵緣故を告申さんにまゞ手を緩めぬへかしといふにぞ紀平治やがて彼を引起して手を放てば白縫ね女使等とゝもに國らかに立こみて。そのいふ所を聞時に彼男がいふやうそれがしね茂光が郎等にて假に爲朝と稱して。おの牢輿にのせられ洛より入る〳〵下りしものゝ。その故ねこれが主茂光上洛せし日信西入道ひそかに相語けるね

爲朝は元無双の勇士なり今癈人となるとはへども心緻をべからぎ加之その殘黨路次
よて奪ひ立去らべ足下一身の越度のこならぎゆゝしき天下の大変なり。しかれべ爲朝
をは心利たる家隷をさし副て。二日はかり前に洛を出し。さもおきものを與よ乘せ。如此
如此の風聞させて晴やかよ下りなはゝ途よて不慮の事ありとも者奴等勞して功おか
らん。この謀かならぎ漏しなひをと私語しのべ。茂光承引て寶の爲朝をべ。二日前よ起程
せたり。おもふよ今ころは伊豆の府よや在らん。又大島へや渡なひけん。それまでは為ら
ぎといふ白縫これを聞て忽地望をうしなひ。朽をしや謀らんとして却て誑られ海山多
よ隔たる四國の果よりはそがし来て。思ひし事もうたかたの。あはでいかて歸るべき。
寶の山へ入おがら手を空うしつ武藤太が首を見もる人もおし。今は思ひたえたりとて。
持せ来りし首級をとりて彼男よ撲地と投つけ既よ自刃せんとおなふを紀平治連忙し
く押とゝめ。おは物よや狂ひなふ。一旦謀を爲損ずとも志だよ移らぎは今宵のみよ限べ
からぎ。盲亀も浮木よあふときあり。優曇花も咲く春あり。この大事を思ひ企なひおがら。
衰て傷らんとしなふは尋常よて在をおれと或は勵し或は諫め。女使等もろともよやう
やくその死を止めしがさるよても憎べきは信西が奸智茂光が便僻へ此奴も茂光が郎

等ならべ生おくべ充よあらぎとて既よ首を剄んとをるを白縫とゞめて。此もの定よ憎
べしといへども假にも御曹司の名を冒して洛より下りしを殺さん事こゝろに快とせ
ぎ。只この機密を漏させぬやうよ計ひて。追放てよと仰すれべ紀平治おゝろを得て彼男
が鼻を剃脣を断割生涯物をいはせじとて衝放もよ鼻より流れ出る血は彼温公が打破
りし瓶よ水よ異おらねどなほ命や惜のりけん兩袂袖もて面を掩ひ苦痛を忍のびて逃
去けり。白縫は事みな齟齬て来し勢よは似げおくて尾越の息の對をうしなひたつかひ
なげよ見えたるをさまゝよいひ慰め衆皆ふゝび單燈を点しつれ門のをとりまで
退出しが白縫はおほ遺憾やありけん彼首を流見かへれべ新よ埒を締まはし伊豆大介
狩野茂光と寫せし榜を大竹のうらよ打つけて。はかめしく建されべ是こそ今宵よが爲
の當の敵おれといひをあへぎ大刀引抜つゝ走りかゝり。竹の中央丁と切る切られて落
る榜とともよ忽然として喊の聲貝鉦の音高く聲え茂光が伏兵一度よ起りて。ゆくべ紀
路を遮とゞめ大將茂光真先よ馬を進ませ汝等是鼠の輩既よ逃が潦よ入りて。いづ地へ
かゆかんとをる。とく〳〵縛を受よとぞ呼はりける白縫も紀平治もおの光景を見て齒
を切り織かお茂光汝信西よ阿諛てかく奸計を行ひおがら僅おる女べらよ恐怖れそ

の蔭だに見せざれば。むなしく立歸らんと思ひつるに。みづからこゝへ出來るは死神や誘引けん其處退死をといきまきて主從十人面もふらず火出るまでに挑み戰ふ茂光多勢おりといへども死を究たる忠臣烈女の尖死刀に切立られ。いひがひなくも逃はしるを白縫は逃さじとて追蒐ねふを紀治平呼とゞめて諫ていふやう茂光勅を稟て御曹司を預下るを中途にて切害せば。その崇誰がうへにあるべき是御曹司を害しぬふまおおじ且亦彼が逃走るは。これを誘引謀とおぼゆるなり切ちらせしを面目にしてとく落ぬへかしと諫れば白縫げにとうけ引て女使等もろともに主從路を引ちがへ加奴木山のかたへ走去りける。

鎮西八郎爲朝外傳 椿說弓張月前編卷之六

東都 曲亭主人編次

第十四回

簾江根を鑽りて配軍を憐 爲朝島を領して酷吏を懲

爲朝は茂光に二日先だちて伊豆國に著ぬひしかば白縫紀平治等が千貫の旅宿は鬧せし事をしりぬれど只白縫は筑紫にて陣沒したりとのみ思ひぬひける。かくて狩野介茂光は爲朝の殘黨を討もらすといへども信西が前見の謀略によりて果して爲朝は奪ひとられざれば。ふかく歎び聽て歸國して島の代官三郎太夫忠重といふものを呼よせて。爲朝を預遣して少しも憐事おかしとぞ仰ける。この三郎太夫忠重は稟性貪婪便佞の小人にて神をも崇めず佛をも尊まず只刹を見ては仇とも交り錢おれば親戚をも他人のごとくし生平に洲民を究て非義非道おほかりつる報にや妻は奇疾にて身まろり子といふものは簾江とて今茲十七歳なる女兒只一人をもてりしかるに彼簾江は汐風あら紀島にはあれど姿もくろまぢ洛の手ぶり見おらふとにはあらねど。そのこゝろざまいと怜悧をべて父には似ざりけり抑伊豆國大島は同國茂加郡下田浦より卯辰の

東京稗史出版社

間まあたりて海上十八里の外まありそのの地方東西二里半南北五里あまりありとかいへれど當時いなほ挾かり本ん島まは山あれども極て險岨おちを濱方いたえを浪のうち洗ふゆゑまは巖石あらいまを出て荒磯からざるもおし或がいふこの島孝安天皇の御時まは開けたりと古老いひ傳ふめれど國を去事僅まは十八里まは過ざれば伊豆の浦々とひとしく開本たらんといへり伊豆國はいまへよを罪人を流さるゝ地あれど大島へい文武天皇元年役小角を配流されしこれはじめ歟。その以前の事傳らを今も小角が住ける岩窟泉津といふ村まあり島人これを行者堂と稱して常まは詣るとなん元來島の風俗まは て夫い漁獵し婦い薪を樵又海藻を苅て粮まは換るを身の務とせりこのこゝまでは五穀もはかゝくしく登らを馴たる人だまは物憂ゑまはいてや源家の御曹司といいれぬひし身のゆかで住果ぬふべ死と心あるも心おゑもこゝお痛しくぞ覺本る閑話休題三郎太夫忠重は爲朝を受とをて舩まは乘せ嚴しく守護して島まかへり磯方まは一ッの石あるを指していふやう凡流人はじめてこゝまは到るものいこの石へ尻をかくるを掘とをとゝとく如此しひへといへば爲朝冷笑てそれい効少よりあまたの兄まも所をおかぞよゝ心の隨まは舉止たり今この石へ尻をかくれば何とのする又かけぞい何とかをると宣ひてその邊へも立よりぬいを否といいゞ打も倒さるべ死光景おれは忠重忍地おゝゝまは五分の怕れを生じこの爲朝も音まは聞ゆる剛者なまは尋常の流人と等しく威勢をもつて制しがたからんまづゝら死めを見せてれのづゝら締伏をるのゝち事を行いばやとて俄頃まは人家遠き山蔭まはあやしの穢屋を造りかけて其處まは爲朝を住せ日まはい只一椀の粮を與へてその餓つかるゝをぞまちたりける。おかるまは三郎太夫が女兒龍江いもの を憐むのこゝろふかければ父があしき行ひの今まはじめざる事まはいれど。まは死て傍痛くおぼへこれを諫ていふやうあの犬禍人の語るを聞侍るまは彼爲朝とやらんい智勇世まは勝れ射といいまはへまも比ふべき人おしとかや今こそかくて在せ免されて締洛しぬふ歟。さおくとも島人その德まは感じて主とし仕ん事を願いゞその威德遂まは父が右まはあるべし。かゝる人をゞまきて勸りぬふべきまは。かく情おく待しひぬひおゞ禍の來たらん事も久しからじ常言まは慈悲い人の爲おらをとぞいふおる。けふより第まは迎とりて誠心を示しぬへかし。と道理を竭して諫れども忠重一切うけ引ぞこいおのれがおを事まはもあらを少納言入道の仰なりとて主君戎光の叮寧まは聞えぬふをおでうまが第おんどまは迎ふべ死用ひざるときい虎も鼠まは劣るといへるを聞ぞや彼縱智勇勝れたり

とも怕るゝまで足らぜといふて。まを〳〵強顔てありしかば簾江にふかく憂て潛まで島婦を語らひ日毎まで饌して御曹司を慰問せけり。この島の男子に髮を結ぎ女子もこれまひとしく紅粉おどいふものに世まありとも思ひしらず形狀こそかくおどろ〳〵しけれ。その心ざま淳朴まして人欲の私簿く仮初まも偽かざる事なし只憂るところのもなに。五穀登らぜして食まを乏し。この故まを人まあふてに。かおらぜあさげいくにあたかといふとぞ。おれ朝飯を食ひぬひしかといぬ事まして國地の良賤へまを會べ。かおらぜ暑寒を述るどし。その食を貴思ふ事。おの一條まてもしらるかゝる例を聞まつけてえ都會繁花の地まを生れて。飽まて食ひ温に被寓然として天年を終らんに。こよおき身の幸福まして實有がた紀事へかし。祭下某生再說爲朝に。ふかく簾江が好意を歎びおぞし。日毎まを物を送り來る島婦等まを親しくものいひぬふ程まを他們え又その德を慕ひて簾江が饌の外まも。をり〳〵乾たる魚束たる薪おどをもて來てかゝる〳〵進らせけり有一日一人の島婦が進らせし魚を食ぬふまその味甚美し。これよくも漬たる鮒かおとて賞ぬへは。島婦がいふやうおれにとらにが漬たるまにあらぜ澳まを鵜といふ鳥ありて魚を取て飼とし侍るに夥魚をとりける時に食殘せるを嵜の挾間おどへ貯置まおのづから浪まを洗にれ潮まを浸りてかくの如し。伊豆の國人にこれを鵜鮒といふよしおれど。いと稀おる物まて侍るといふ爲朝緣故を聞ぬひて。往年ゴれ豊後國まありしとき。木綿の山邊おる紀平治といふものを訪けるまを猴酒をもて當日の管待とせらましが今又おゝまを謫されて。この饌を得たり猴酒鮒鮒に。世まを山海一對珍味と稱ぜさてもゴれおがら口まに果報ありけりとうち笑ひぬへは。島婦もいとうれしみつゝ。おのが家路まを歸りけるかくて今茲えやゝくれて。あくれは保元二ッのとしの春も彌生のころまおりつ原來この島に去年の冬さへ暖まて。雪の降ともなかりし程まを春に殊さら住よくあれど華鹿鳴く浦の筥屋まを風をいさみ嵜うつ浪まを夢をやぶられ。寐覺ゴびしき曉まを鶴ゴ鳴聲聞えしかば爲朝枕を敬ぬひて奇おるかおこの島まを獸に牛馬猫鼠の外におく鳥に鴈鴨さてに尋常おる小鳥やうのえのゝこぞ渡り來ると思ひしまを今鳴も社に鶴まやあらん。かゝる島え又稀まに渡るまおそとひとりごちやがて起出て見ぬふまを果して一隻の鶴飄々然として飛來り。ほとりちかう下たつと紀物の響あるまこゝろつ紀て眼をとめて窺するまを足まを著たは黄金牌おりけれは泫然として懷舊まを堪ぬにを是おんさきつ年ゴれ琉球國より得てかへり島羽上皇まを獻りしを又放させぬひしと聞たるがゴれまを往返をる事既まを三

たびゝ及び。今又こゝゝに来れるハかゝらぎふか紀故あらんとひとりごち掻よせつゝ彼牌を見ぬへば背に墨くろく。

眠柳閑花逸二水亭一　仙翁再去還二東溟一
逢春便覺孤霞迥　清影何時照二我庭一

と寫せしかばうちかへして讀をハりあばし尋思して宣ふやう親兄弟ハいふもさらん。妻子眷屬みな死亡せて。今ハ爲朝をれもハんもの。世にハあらじとおぼえしにこれ何人の筆おらんよしその人ハ誰にもあれ。かへしせんとて彼牌に水を沃かけ袖もて楚と印ぬへハ。文字ハ左旋に見えおがら衣の上にぞうつりける。やがて禿たる筆をとり出又この牌に。

いにしへのためしも思ひいづの海にとゝふ鳥の跡を見るかな

と書つけぬへば鶴ハ忽地飛揚り往方も去らぎおりにけり。浩處に人聲遠く聞えて。いと懇刷かりしかば。ふかくこゝろに怪みれば。門邊を過る島人を呼びとめて。けふハ何事のあれば。やかくさゞがしと問ぬへば。島人答ていまだ緣故をしらでや在をる。この島にハむかしより野牛野馬おかくあまど。いと猛くて人をちかつけねば。これを養て物を屑せんとをる人もおく。只夏のむゝめに鰹を釣るとき牛の角を用て餌とするゆゑに春は季に至る毎に浦曲に住をもの隊をおし野山にゆきて牛の角を折とるこ常にハ輙く折るゝものおらねど木芽の萌出るこ初ハ只一打にて落るにおそしかをども彼牛ども。人を見れば大にあれ出角突に衝んとをるを鉈きものハ走路をうしおひ突倒さきて痍を被り矢庭に死をるものもあり此さまざまに駭きて馬もゝろともに走りまハり蹴かへされ踏たふさるゝ人も少からぎ。けふハ牛を將出をとて朝まだきよりを人を集會今の如く喊の聲を揚るにていふといふ爲朝これを聞て冷笑ひぬひつゝかばかりの事に夥の人力を費とやある。これ近曽肘の筋を断れたれば力ハむかしに劣れども。おほ水牛をも屑と思ハぎ。さらばゆきて見んと宣ひて。こは男に鄉導させて。そは處に到ぬへば果して夥の島人等法螺貝を吹喊の声を揚手におの〳〵長紀竿を拿て野牛の角を打折らんとて立さわぐに數百足の牛馬狂ひ出て。走りまハる中に他牛より一歩大やかおる黄牛ありて喊聲にも怕れぎ法螺貝の音にも駭ぎを走る事馬よりはやくて。かけ駐むべうもあらざれば衆皆慌忙て一崩に崩かゝるを牛ハおほ追ひ来りて。後きて走る一人を突たふさんとしたりしかば爲朝吐嗟と立隔り左右の角を拖鬟て右手へ撲地と捻伏ぬへ

ゞ角ハ根よりほきと折れ牛ハ仰さまに顚轉つゝ反起んとをるとおろを片足ヨてその頭を楚と踏をえて動せぬハぞとく繫ぎ留よと仰ほれゞ。人みな走り来つ項へゞ索を掛ん四足をゞ繫んとて罵あふを爲朝うち笑ひて牛ハ箇樣々々ヨして繫ぐものぞと教ぬへば島人等ハはゞめてその鼻ヨ索を引とゐを事をおりてまづ竿の頭を切とり。とかくして鼎をつらぬきて。やうゞく繫留る折しも前面の山間より長おるあら馬ヨ駈立られ。十四五人の男ども息も吻あへぞ迯来るゞ馬ハ聊然として蹄の音を高くし。矢を射るどく跳かゝるを爲朝佶と見ぬひて行ちがひさま鬣飼み閃と上ヨ跨りて芝生高峯のきらひおく乘廻しかけ飛し野牛野馬を追詰々々或ハ上より尾つゝを拖駐或ハ丁とふり倒しぬふヨ猛犯牛ハ振かへりて角もて突んとをるを物ともしぬハぞ下ぞ立て組伏せ捻倒し暫時がほどヨ百五六十匹の牛馬を輙く搦捕ぬへゞ島人等且驚き且歡てみな地上ヨ拜伏し君ハ定ヨ人間ヨハあらぞ天神ヨて在まほこ。この地方ハ東海の孤島ヨして。いましへより人物おく野ヨ牛馬ありといへどもこゝを養押るをゞだヨあらぞ今君が武勇ヨよりて不意もかゝる寶を得て活業の助を増せり願くハおの島の主とおりておを恩澤を施しぬへ島の代官三郎太夫忠重ハ竹曲ヨして常ヨ民を寃るゝ多おれゞ吾們生ながら彼が肉を啖んとれもふと久し訪たまへ直ヨ三郎太夫が第ヨ押よせ詰腹切らせて日来の怨を散をゞーと異口同音ヨ申けり爲朝聞て宣ふやう汝等ヨれヨ志をよをる事幸甚ーヨれ今配軍となりぬれど清和天皇の後胤まして八幡太郎の曾孫おり。いかで先祖をゞ失ふゞ犯。又おの島ハ朝家より賜たる領おれゞ。われ主たらん事勿論なり。おかるヨ忠重が無禮をも咎めぞ彼が隨意棄られて笘屋にいく夜あかせしハ。わが痴いまだ愈ざりしをもて。おむし時を待たるのみ。さらゞ走向へと仰せて。ぬたゝび裸背馬ようち跨ぬへゞ夥の島人前駈後從して山方おるものハ鎌斧を携浦曲おるものハ擔械を金更ヨ臆する氣色もなく忠重が第ヨぞ押寄ける。三郎太夫忠重ハ。この事と傳へ聞て大ヨ驚犯爲朝ハ世の梟雄なるヨ。今又洲民の心を得たらましかゞ虎ヨ翼をそへたる如し彼と爭ひて命うしなハんよりゞ只願誠心をあらハして。身を全ほべしと深念し俄頃ヨ烏帽子引被て。女兒簾江と家隷を將て道次ヨ出迎ふ島人ハこの光景を見て思ふヨたがひ左右おく打もかゝり得ぞ。おゞ踟躇てありしかゞ忠重膝行頓首して爲朝ヨ對ひそれがし嚮ヨ強顏待し奉りしハ朝威主命兩おがら重して己とあたハぞ既ヨ罪をゞ御曹司ヨ得て悔れども及ぞもし身の過を恕しぬハゞ島の賞罰を任せ奉るべし。あハれ今よ

爲朝怒りて三郎太夫を食
能江爲朝にまいりて爲丸朝
雅嶋君を生

り忠重を家隷郎等とも召れ下さるべしといへば簾江父の跡に居かへりて忠重先非を悔て言みお實情より出待り御曹司もしるらねが日来の意志をあらし召ば父が一命を助なへかしとて父子主從も泣とも頭を地に著しかば爲朝聞て宣ふやう忠重民を寃るの罪許がたし。あかねあれど既にその過を悔るに于ては女兒簾江とやらんが信る行ひをもて父が罪を贖べし。又れ市人の跨を潜る恥辱を棄ぜといへどもいかで孃母が一椀の恩惠をおもはざらん汝忠重いよ〳〵意を轉して野心を存する事あかれと仰れば忠重簾江にさらに家隷とも大に歎びやがて爲朝を第宅にむかへ請ずて厚くこれを管待し又島人等にも食を與へておの〳〵その家にかへらせける。かくて忠重は日おらぬ爲朝の館を造り出して移し入れまゐらせ。おほ疑れドとや思ひけん起臥の陪從とも御覧ひへとて女兒簾江をまゐらせけり爲朝は元来色を好みぬはざれども。又その志をも空しうあがたくれぼして。臥房ちかく召れしかば簾江三年が程に三人の兒を産て冢子を爲丸と名づけ次を朝稚と名づけ季は女子にて。島君と呼びぬひぬ爲朝大島を管領しぬひてより民に耕作蠶飼を教へ。みづから山野に徜徉して業をもっぱら善をあげて不能をあれみぬひければ。洲民よろこびて父母のおもひをおせり。さる程に爲朝は三宅新島神洲利島御藏をへて五の島をも打從へ數十艘の船を造らせて往返國司に異おらぬ。この島々は將野分茂光が采地おれども。たえて年の貢を出す事おければ茂光おれを憤りおもひて島の代官忠重を呼よせ汝上臈を壻として。これをこれとも思はぬぞおどいたくいひ懲せし程に忠重大に迷惑し。潜に島の産物を運送せるを爲朝はやくもおりて。おは奇怪こと。忠重を責なへば怕きてこのゝちはかゝる事をせぬ茂光はまを〳〵恨みておば〳〵忠重を呼べども虚病して島を出ざれば。いかにとせんをべなくて只徒に年月を經たりけるとぞ

第十五回

白縫潮を志渡に汲む
新院生を魔界に攀ぬふ

白縫は往に千貫の鄰にて。茂光が伏兵を切ちらし。紀平治等とともに讃洲へ立かへりて。遺恨やるかたおく。ふたゝび計策をめぐらし。まづ讃岐院（新院今はこの國おましまを）をもてなか申奉るなり）竊とり奉りて。船路より伊豆の大島へ押こたり御曹司と一手におりて。事を起させまうさば。東八薗國は輙く從ふべしおど只管に肺肝をくだき紀平治にもおもふ程を聞えぬふに紀平治がいふやうそれがしもおの事を思はざるにあ

東京稗史出版社

らぎ。あかれども新院にはゞめ當國の在廳散位高寄が造りたる松山の堂舎に在しけるが國司既に直島といふところに御所を造出しく遷し奉り四方に築垣を塗まはし。只門一ッをあけて晝夜の守護嚴るとおく三度の供御を進らするの外に人の出入る事を許さぢと聞ゆ。かゝれば數多の軍兵をもて奪ひとり奉らんとをとも事かおうべうもあらぢ。もし愁に爲損ぜば大島に在ます御曹司のうへまでも危かるべしとかく時の至るを待なへかしと諫申せば。こゝも又思ふまゝひおくて。いよ〳〵命運の微死をうち歎ぬひける。かくて保元は年号に僅三年にてをはりて。あくれば平治と改元ありけり洛にも去年の八月十一日。後白河の帝皇位を第一は御子守仁王に傳へぬ。二條院と申すは是こゝに中納言兼中宮權大夫右衛門督信頼卿に先帝(後白河帝)の寵臣おゝ近習小納言入道信西と權をあらそふをもて信頼遂に左馬頭義朝を相語ひ平治元年十二月に數千の軍兵を起し。まづ上皇(後白河)主上(二條帝)を押籠奉り遂に信西が首を刎て六條河原に梟首さりける。こゝに於て信頼の威勢日来に百倍して三公百官恐怖てその下知に從はざるものおゝしゝられども彼卿は短才淺智にしてこゝろ驕り只前門に虎を防きて後門に狼の入る事をしらぢ主上潛に脱れ出て清盛が西八條おる事に入御ましましければ平家時を得て直に信頼義朝を攻むこゝに待賢門の夜戰敗れて信頼誅伏し。義朝は尾張の内海にて長田が爲に害せられ夥の子たち或は誅せられ或は謫され源既に凋きて汚名をおがし。平家は榮華に奉をむかへて氏族こなた高位高官を授けられ富貴世の人の耳目を驚せり。かくては白縫もいよ〳〵宿志を遂る事かなはぢ常言に坐して食む山も空しといへり。頼む蔭おゝ主從が旦開の煙たてかゝて。十人の女使も已をを得ぢ身の暇をぬはりておのがさまゝ〳〵おりもてゆき。今は紀平治と二人の女童のみ殘りとゞまりしかば志渡の浦曲にうつり住手おゝぬ漁人の業をしつ。潮を汲み貝を拾ひやうやくその日を送りぬふに紀平治はじめより。女あるゞとひとつに居らん事を厭ひて白峯といふとおろに退居し薪を樵炭を燒て僅おる錢を得れば。おれを志渡に送りて白縫主從が衣服の助とせり白縫は又漁船旅人が江湖上の雜談をるにも耳を敬御曹司の安否をしらまほしくおぞせしに有一日行僧が東路の物かたりする序に鎮西八郎爲朝は伊豆の島々を打したがへ憚メ氣色もなく在をを領主狩野介茂光もゝてあまし。今は彼島々へ船の往來を停てみづから防禦の外に爲出したる事もあらぢおゝど語るを聞てまづうれしくいかにもして大島へ消息しを。が恙おなをもおらせ進らせ次よ

くゐこが身も渡海せばやと。ゐおぼせども浪風あらき青海原の稀に渡るも難かるべき島への往来を停られゝとりと聞ゆれば。これも又おゝろに任せず更にひとつの物思ひをまして。あるまかひおき世をはかなみ。おゝ八年の月日經て長寛二年八月下旬の事ありけん浦人等かいひもて傳ると聞まさても新院ゐ年来御立願の事おゐしまをと聞えしが。おの七日ばかりゐ夜おゝ直島の磯方に潜出ぬひ潮水に御姿をうつして。讀經しぬふ龍顔のいとおどろゝしきを面あたり見奉りしものもありとぞ。こゐ實語やらん虚言やらん。いと痛しゐとゑかしとさゝめきあふを白縫つくゝとうち聞て。己が身久しくおの浦に住おがら守る人の隙おければ情由をあらせ奉るよしもあらざりし。もしこの事實語ならば玉體に親つきて夫がうへをも聞え。わが誠忠の程をもあらせ奉るべしと思量し。その夜の深るをまちて只ひとり直島に潜ゆき御所のほとりを徘徊して彼此を尋たてまつれば御所よりゐ遥こおたおる浪うち際に磯馴し松一樹ありて彼處に人影してけれゐ是こそと思ひつゝ歩みよるに新院ゐ樹下よりさし出たる巖石の上に結跏趺座しさゝやかおる机に經を載せて御まへに置ぬへり寔にむかしの龍顔にゐわしゆと見えて。思ひしよりゐいと窶はてゐひつ紬させゐひし御髪のふたたび長伸びたるが御鬚にふり亂れ御鬚おども長く垂て。秋の柳に異おらぬ御衣もめし換る事おかりけるにや破れ垢つきし香染の法衣い御袖浦風に吹翻されたる間より白く細やかおる御手の骨のみ高くあらゐれて御指の爪も尖く見えぬへり悲ゑかな十善の君とし。かく薄命に在をるゐ。おぞと思ひ奉れゐ涙のみゐふり落て。棄さんやうをもこさまへぞ。こおたまつい居るさへ忍びかねて。一膝高くうち歎ゐ新院ゐこ此膝まて。人ある事をおろし食けん。おづやのに見かへりぬひて汝い誰そと問ぬふに白縫涙をかゑゐらひて。これゐ保元の戰に北類おゑ働して君を輙く落しまゐらせたる爲朝が妻に白縫といへるものゝ當時こらはゐ大宰府にありつるが菊池原田に攻られて父忠國も討死し夥の家隷もみお戰場に屍を曝し侍り。こらゐも遂に擊るべかりしを宗徒の郎等八町礫といふものに救れて爲朝も悉おく落たりと聞えしかば主從十人この讃岐へ迯れ来て外をから君の御術ともおり奉るべうおもふ折しも不意も夫の仇武藤太といふものを殺し。爲朝ゐ既に擒れて伊豆の大島へ配流さるゝと傳へ聞中途にて奪ひとらんと謀りて東路に走下り領人薪野介茂光が旅館を劫まに事成らをしてむおしくこゝに立かへり君を盜こ出し奉りて船路より大島へ押渡り爲朝といもに事を計るべう思へども身に從

ふものゝ一人の家隷と。五三人の女使のみ外ゝ助の兵士おく。殊さら國司殿重ゝ守護し奉れば謀を施ほゝよゝしおくて。只徒ゝ七年あまり。今ゝ八年の秋ゝもおりぬ時おゝ哉近曽御立願の事おゝしまして夜な〳〵潜出させぬふと灰ゝ聞畏けれど玉體ゝ恐尺して。せめてゝ年来の誠忠をもゝらせ奉らぺやとて參り侍りと稟す新院ゝよく聞食ていと苦しげなる御息を數回吻て宣ふやう國亂れて忠臣あらゝれ雪厭て松の操をあるとゝ汝等が事ゝかし朕堯舜の徳おゝしといへども。又桀紂の行ゝも倣ゝ事。あかるゝ古院の御はからひとして位を體仁(近衛院)ゝ奪れ遺恨やるかたなけれども朕が不德のおを所なりと思ひかへゝして黙止せしゝ體仁世ゝ早ゝて後ゝ御はからひこそあるべけれ數ゝえあらぬ雅仁(後白河院)を位ゝ即せぬひしゝいかゝぞやかく恨ゝうらゝを累たれぺ。遂ゝ頼長を相語爲義等を召集會既に干戈を動かをといへども命運全からざれぺ只一戦ゝ打負て。うき島守とおるゝ物かゝ朕が爲ゝ命を隕ものいくそばくそといふ事をあらぢ就中爲義が夥の子どもを將て參りし事いと愛たうもおぼえしゝそれゝも劣らぢ汝白縫とやらん婦女子の身をもて八年が間朕ゝ志をよせつる事賞するゝおほあまりありこの誠忠うれゝさゝ朕思ふ程をもゝらぢべゝそゝ保元の擾亂ゝ朕が人慾の私ゝ起りて。古院の崩れぬひゝをも悼まぢ時を得がおゝ鑯を研せ漫ゝ位を爭ひしゝこよおき身の不孝ゝして地祇ゝも見ゝなされかゝる島峯ゝさすらふ事みづから作せる孽へと悔おもひ一旦の過を畏みて偏に正覺ゝ志し三年が程ゝ五部の大乘經を書寫したれど貝鉦社音も聞えぬ荒磯ゝとゞめん悲しさゝせめて筆の跡ぢかりゝ洛の中に入れさせぬへと仁和寺の御室の許へ頼つかゝもとて。

濱千島跡ゝ都へかよへどゝ身ゝ松山ゝ音をのゝぞ鳴

と讀て經ゝそゝを送りゝゝ倘呪咀のおゝろまや。と彼信西が奏しけるゝよりて。とりも留ぢ返されゝこそかへもく〳〵も恨おれ。朕ゝ不孝の罪を悔て既ゝ佛門ゝ入れるをもお怪狐疑し信西が阿諂の言語を諾おゐる。雅仁が行の道ゝあらざる事多かる中ゝも義朝ゝ仰て父の爲義を討せたるぞいとも愚おりおる孔子も既ゝいへるを聞ぢや。むかし明主父ゝ事て孝おり故ゝ天ゝ事て明おり母ゝ事て孝おり故ゝ地ゝ事て察なり長幼順ゝして上下治るといへり夫天子ゝ萬民社父母とゝて孝をもて天下ゝ則るものを。その父罪ありとて。その子ゝ仰せて討せんゝ民ゝ虎狼のこゝろを教るゝあらぢや。何をもてか民の父母といゝん。又被義朝おそ憎てもおほゝくむべけれ親兄弟ゝみお朕がかたへま

いれるを彼は父よりもつかせていたく攻伏せ己が榮利に走りて父を誅せもし聊も子たるの道をあらば縱勅命ありともいくたびもこれを固辭もし許されぬ。己が身をもて代るべし。おほそれまでにも及ばぬ當初爲義が朕が方に參るをあしと思はぬ面を犯してこれを諫め從ぬその身眼前死して忠孝を全くせば父子相別きて戰の恨もおく。父を殺その讎もあらじかく君臣悉く道に違おがち彼等はいやましに榮るも傍痛く幸の跡だに留らぬ烏の頭は白くなるとも洛へ歸るよをがもおしゆざさらはこの經文を魔道へ回向し。これ生ながら魔王とおりて憎しとれもふ義朝信西等はいふもさらへ。雅仁にもうきめ見せんと誓をたて。日とおく夜とおく懸念怠らざるかひありて。まづ信頼義朝に謀反のこゝろをつけて。信西を殛させ。又義朝をば家隷長田に討せて父伐誅もるの天罰を示し。又清盛に驕奢のこゝろを憑て雅仁を押籠させ。をべての讐は過半ころし剿しつ今は清盛が氏族親族のみ殘きり。見よ〳〵久しからぎして彼等をば當國へ引よせて。この海原の水屑とおさん。こゝに夙願五年に及びてやうやく成就の時至れば。汝に見る事今をはじめとして。又今を終りとをとく〳〵歸り去べしと仰をれば白縫いよ〳〵うち泣て君かくまで平家を滅さんとおぼし召ば。是より御紘はめされて潛に爲朝が配所近き國へ渡らせたまへ東國には甲斐信濃に一條竹田の黨上野下野に新田の一族常陸に佐竹おんどおほ夥の源氏もあり君渡御ましませしと聞おらば馳參るもの多かりおんとく〳〵と勸め奉れば新院御頭をうちふりゐい悪おるかなこが念願成就して命旦夕に迫れるものを。何の違ありて東へは赴くべきされど汝が誠忠のうれしきに報ひせではあるべからぎつら〳〵おもふに汝分鏡の契うすくして夫婦の緣は既に絶たぎとても添果ん事はおぼつかなしもあらねど朕が聖夫婦が護神とおりて三年が程にはかならぎ爲朝に逢をべし。今より白峯の與おる兒嶽に隱まて時を俟おほ疑はゝ面あたり驗見せんとて仰もあへぎ彼經机を高く捧て衝と御軀を起しゐひ且く呪文を唱つゝ夥の御經を海上へ破落々々と擲ちぬへば風颯とおろし來て忽地逆まく浪のまに〳〵潮水激して立のぼり鯨鯢の吹くに琴琴たり時に一道の黑氣玉體を捲ひ隱す程こそあれ電晃きたり雲間にあやしの御姿隱々として見江させたまへば。今はは天狗道にや入りぬひけんと思ひ奉るに淺ましく白縫はゝ去ばしをおたを俯おがみ夢路をたどる心持しつこが住む浦に歸りしが果して新院は次の日に崩れゐひぬ時に長寛二年八月廿六日聖算四十六歳と聞江し。この秋までもおわ國司の守護怠ならざれば。かる

がるしく潛出させぬよう幸にかなわせぬわ孫どこれ年來執念おわしーませーゆゑ3御魂のみ勾に顯れて。人3も見えみひしーとぞ。なほ後の物がたりわ編を續卷を更續て著ー三十冊を全本とも。

東京繪史出版社